三重県埋蔵文化財調査報告　１０８－３

池ノ上遺跡・小狐遺跡・西黒部西山遺跡

１９９３・３

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は平成 4 年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、松阪市の西黒部地区の池ノ上遺跡・小狐遺跡・西黒部西山遺跡の発掘調査報告書である。なお、西黒部西山遺跡は、西黒部遺跡、西山遺跡、寺浦遺跡とも呼ばれている遺跡である。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会の、他を県農林水産部の負担による。

3．調査体制は下記によった。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県埋蔵文化財センター

4．調査にあたっては、三重県農林水産部農村整備課、同部耕地課、松阪農林事務所、西黒部地区土地改良区及び地元の方々、松阪市教育委員会にご協力をいただいた。

5．発掘調査は増田安生、浜口元が担当した。整理・報告書作成は担当のほか調査第 1 課及び管理指導課が行った。

6．現場調査では、宇野隆夫氏・廣山堯道氏に指導・助言を賜った。また、類例調査にあたっては、茨城県教育財団や福島県文化センターの協力を得た。記して感謝の意を表する。

7．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井　戸
　ＳＫ：土　坑　　ＳＦ：焼土坑

8．本書で報告した記録図面類、写真および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

9．図面における方位は、池ノ上遺跡は第Ⅵ座標系を基準とする座標北、小狐遺跡・西黒部西山遺跡は磁北を用いた。なお、当地の磁針方位は西編約６°20′（平成４年）である。

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

例　言
目　次
Ⅰ　前言……1
Ⅱ　位置と環境……1
Ⅲ　池ノ上遺跡……5
Ⅳ　小狐遺跡……21
Ⅴ　西黒部西山遺跡……41

挿図目次

第１図　遺跡位置図　……2
第２図　遺跡位置図　……3
【池ノ上遺跡】
第３図　遺跡周辺地形図　……5
第４図　池ノ上遺跡平面図　……7
第５図　釜屋内遺構実測図・釜屋遺構配置図
……9
第６図　焼土坑実測図　……10
第７図　粘土坑実測図(1)　……11
第８図　粘土坑実測図(2)　……12
第９図　粘土坑実測図(3)　……13
第10図　粘土坑実測図(4)　……14
第11図　遺物実測図　……16
【小狐遺跡】
第12図　遺跡周辺地形図　……21
第13図　小狐遺跡平面図　……23
第14図　土層断面図　……24
第15図　粘土坑実測図(1)　……25
第16図　粘土坑実測図(2)　……26
第17図　粘土坑実測図(3)　……27
第18図　粘土坑実測図(4)　……28
第19図　粘土坑実測図(5)　……29
第20図　粘土坑実測図(6)　……30
第21図　粘土坑実測図(7)　……31
第22図　粘土坑実測図(8)　……32
第23図　粘土坑実測図(9)　……33
第24図　粘土坑実測図(10)　……34
第25図　小粘土坑群実測図　……34
第26図　小粘土坑実測図　……35
第27図　遺物実測図　……36
【西黒部西山遺跡】
第28図　遺跡周辺地形図　……41
第29図　西黒部西山遺跡平面図　……43
第30図　ＳＨ20　ＳＫ９　ＳＥ17実測図…44
第31図　遺物実測図　……45
第32図　遺物実測図　……46
第33図　遺物実測図　……47

挿表目次

【池ノ上遺跡】
第１表　粘土坑一覧表　……8
第２表　小粘土坑一覧表　……15
第３表　遺物観察表　……17
【小狐遺跡】
第４表　粘土坑一覧表　……22
第５表　小粘土坑一覧表　……35
第６表　遺物観察表　……37
【西黒部西山遺跡】
第７表　遺構番号対照表　……42

図版目次

池ノ上遺跡　……18～20
小狐遺跡　……39・40
西黒部西山遺跡　……49・50

Ⅰ　前　　言

県営ほ場整備事業西黒部地区にかかる埋蔵文化財の試掘調査は平成4年1月7日に実施した。対象遺跡は松阪市西黒部町に所在する池ノ上遺跡、小狐遺跡、西黒部西山遺跡、下メ遺跡である。なお、西黒部西山遺跡は、西黒部遺跡として5,000㎡の範囲とされている遺跡であるが、この試掘時点では寺浦遺跡と称されていた。

試掘調査の結果、遺構や遺物の状況から、小狐遺跡と池ノ上遺跡は本調査が必要であることが判明した。下メ遺跡については遺構は確認されず、遺物も中近世の土器が少量出土したのみで、工事施工可と判断した。

本調査の面積は、池ノ上遺跡が1,700㎡、小狐遺跡が1,100㎡、西黒部西山遺跡1,800㎡である。

調査期間は、池ノ上遺跡が7月1日から8月27日まで、西黒部西山遺跡が9月1日から10月12日まで、小狐遺跡が9月28日から12月3日までである。

Ⅱ　位置と環境

1　位置と周辺の遺跡

池ノ上遺跡（1）、小狐遺跡（2）、西黒部西山遺跡（3）は、櫛田川下流西岸、松阪市西黒部町の標高1m前後の低地部に位置する。調査地は、いずれも周囲を水田などで囲まれた微高地である。

西黒部地区では、現在のところ遺跡は他に確認されていない。そこで、もう少し広範囲に松阪市北東部の遺跡に目を向けて、以下に時代順に概観しておきたい[1]。

旧石器時代及び縄文時代では特筆すべき遺跡は確認されていない。弥生時代では、西黒部町の南方約2km にある堀町遺跡（4）、約3.5km 南西の市街地にある湧早崎遺跡（5）、中世古遺跡（6）、那知山遺跡（7）、杉垣外遺跡（8）から弥生土器が出土、採集されている。なかでも杉垣外遺跡では断面V字状の溝が確認されており環濠と考えられている。

古墳時代では、4世紀と考えられている茶臼山古墳（9）、6世紀後半と考えられている鈴ヶ森神社古墳（11）、大塚山古墳・丸山古墳・糠塚古墳からなる佐久米古墳群（10）、垣鼻1・2・4号墳（12）がある。また、小久保遺跡（13）からは古墳時代前期の土師器が出土している。

古代・中世の遺跡では、西黒部町の東方約3km の砂堆上に、浦山遺跡（14）、南山遺跡（15）がある。浦山遺跡では、土師器片、須恵器片が採集されている。南山遺跡は昭和53・54年に発掘調査が実施されており[2]、古墳時代後半も含めた奈良、平安、室町時代の集落跡であることが判明している。西黒部町の南西約4km の市街地には羽根遺跡（16）、こうじ垣内遺跡（17）があり、ともに山茶椀等が採集されている。また、西黒部町の西方約3km 程の松ヶ島町には、16世紀後半の築城である県史跡松ヶ島城跡[3]がある。

2　黒部の製塩

池ノ上遺跡や小狐遺跡の周辺には「釜屋」や「今釜」・「西釜」・「とぼし釜」などの地名が残り、黒部地域の郷土史を丹念に調査した西山傳左衛門氏によって製塩との関わりが指摘されていた[4]。古くは伊勢神宮領の「黒部御厨」・「黒部御薗」が成立しているが、塩を貢納していた記録は見られない[5]。中世後期になると『沢氏古文書』[6]の弘治二（1556）年のものに「西黒部塩竈公事」とあり、盛んに製塩活動が行われていたことが窺える。永禄八（1565）年の『船々聚銭帳』[7]にも「くろへ船」の記載があり、大湊を中心とする海運流通の範囲に当地も含まれていたと考えられる[8]。大湊付近では14世紀中頃にはすでに古式入浜が成立していたと考えられることから、当然西黒部地域においてもこのような形態の塩浜が営まれていた可能性は高い。幕末の地誌である『勢陽五鈴遺響』[9]には「食塩ヲ焼テ出ス。方俗黒部塩ト賞ス」とあり、黒部周辺では盛んに製塩が営まれていたことを知ることができる。

〔註〕

①周辺の遺跡については、主として下記の文献を参考にした。

・松阪市史編さん委員会『松阪市史』第二巻　史料篇　考古　1978

②a．下村登良男『南山遺跡発掘調査概報』Ⅰ　松阪市教育委員会　1979

b．『三重県埋蔵文化財年報』10　昭和54年度　三重県教育委員会　1980

③松阪市史編さん委員会『松阪市史』第六巻　史料篇　文化財　1979

④西山傳左衛門『黒部史』松阪市立図書館　1955

⑤「神鳳抄」『群書類従』巻第九　第一輯：続群書類従完成会　1932

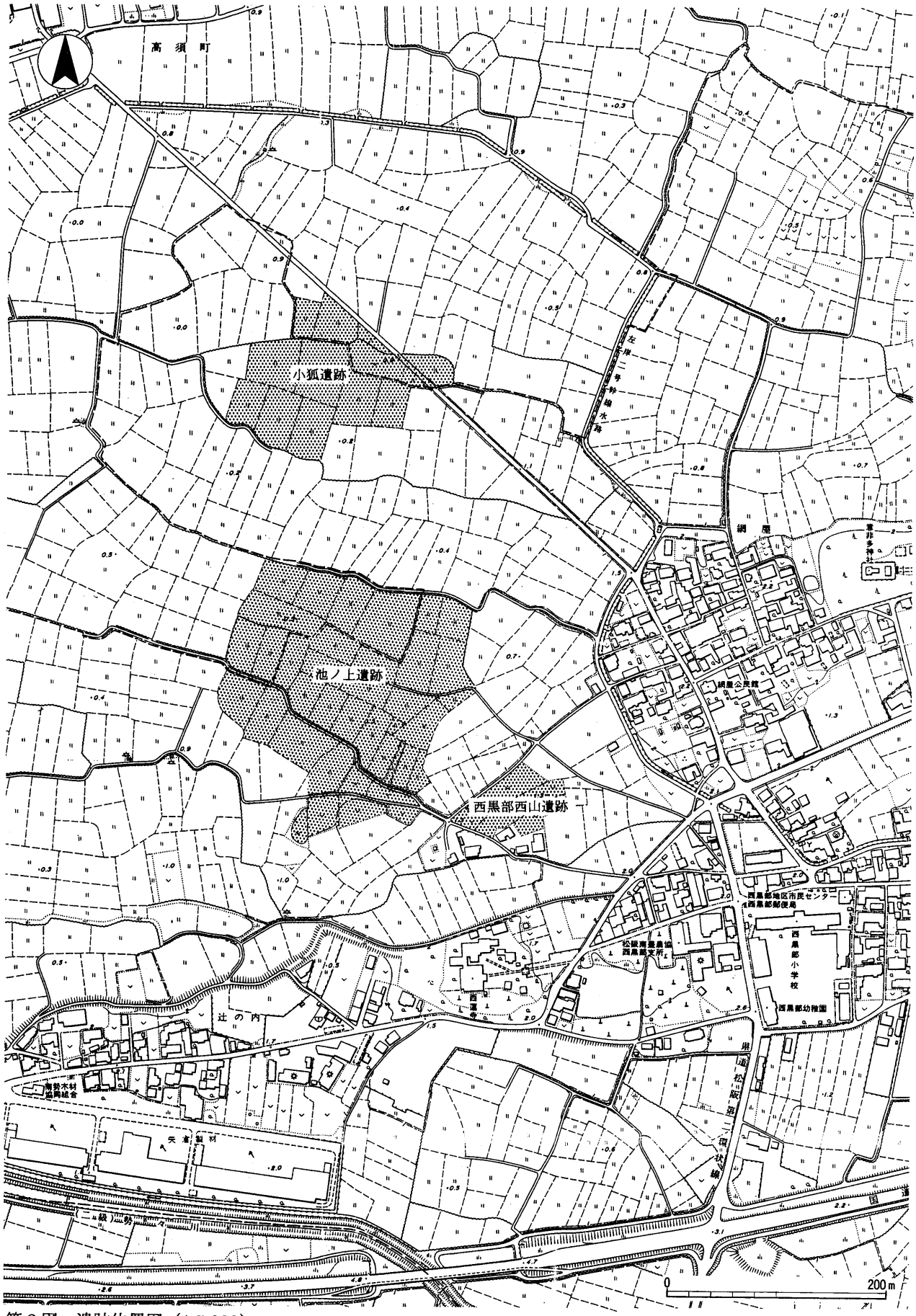
⑥「沢氏古文書」（内閣文庫蔵）（『松阪市史』第三巻　史料篇　古代・中世　1980　所収）

⑦伊勢市大湊支所蔵

⑧下中邦彦編『日本歴史地名体系　第24巻　三重県の地名』平凡社　1983

⑨安岡親毅『勢陽五鈴遺響』（三重郷土資料刊行会　1985）

第1図　遺跡位置図（1:25,000）（国土地理院『松阪港』『松阪』1:25,000から）



第２図　遺跡位置図（1:5,000）

Ⅲ　池ノ上遺跡

1　はじめに

池ノ上遺跡は、松阪市西黒部町寺浦字池ノ上に所在する。今回発掘調査を行った部分は、ほ場整備事業によって改変を受ける微高地部分で、現況は畑地であり、遺跡は周囲の水田部分にも広がっていると考えられる。発掘調査面積は1,700㎡で、平成４年７月１日から同年10月13日まで行われ、同年８月29日には現地説明会を開催し、250名の参加者を得た。

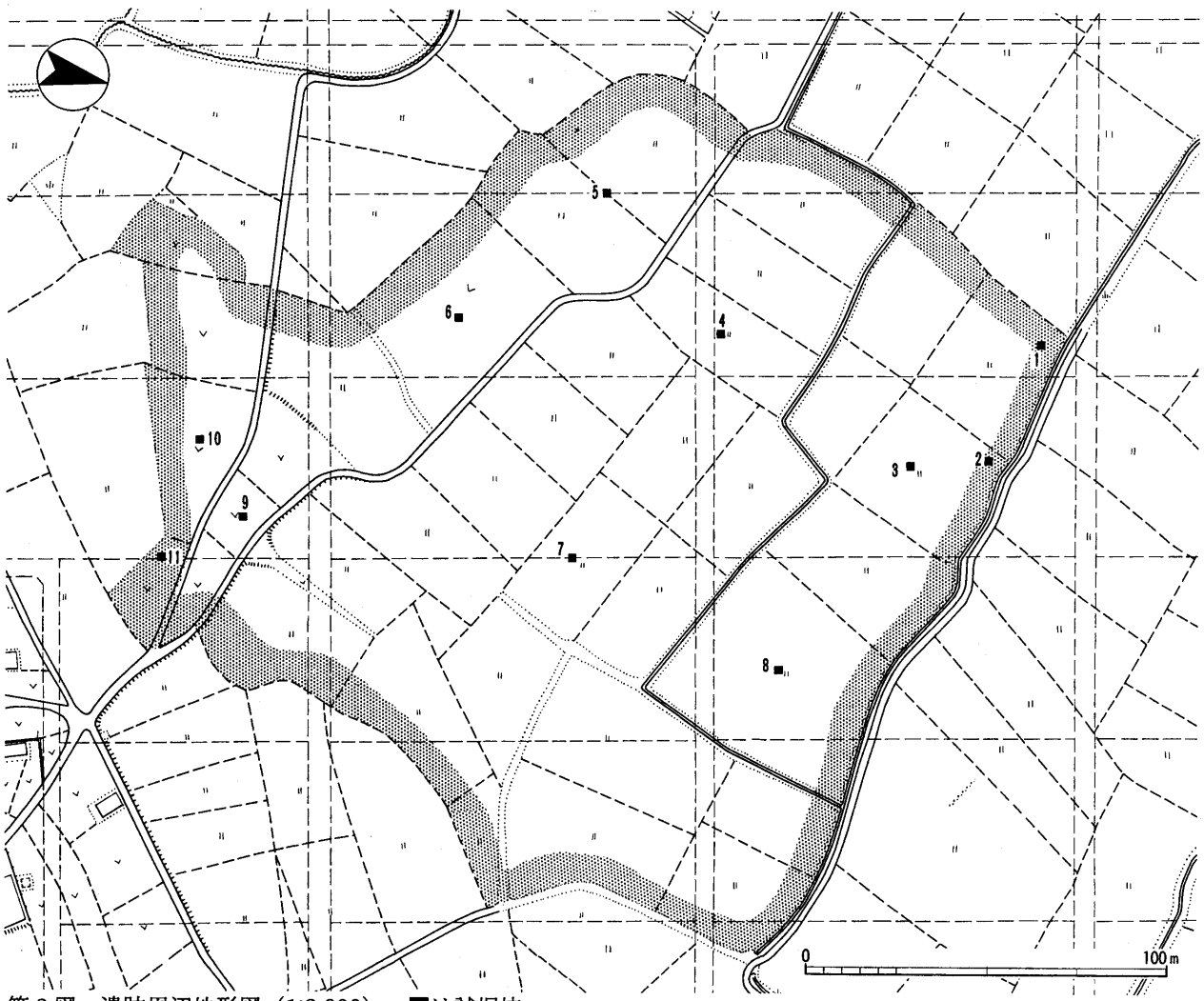
2　遺構

本遺跡は標高１m程度で、周囲を水田に囲まれた微高地に位置する。遺構面は、表土下0.2～0.3mの耕土直下で確認している。遺構は、土坑や溝などが検出された。土坑は、よく焼けた焼土を含むもの［焼土坑］、方形もしくは隅丸方形を呈し、底面および壁面に粘土が貼り付けられたもの［粘土坑］、小型で円形もしくは楕円形を呈し、底面および壁面に粘土が貼り付けられたもの［小粘土坑］、単に掘りくぼめられたもの［土坑］に分けられる。また、遺構は調査区東半部に集中しており、西半部には遺構がほとんど見られない。いずれも出土遺物はきわめて少なく、遺構時期の決定は困難であった。

(1)焼土坑

調査区中央部から中央部北側にかけて赤褐色に焼けた部分がみられる。焼土の範囲は、おおむね楕円形か不定形を呈し、その分布は３つに分かれる。

第１群は、ＳＦ22・23・84・87～89で構成され、調査区中央部に固まって存在する。焼土群の南にはＳＫ67～69の小粘土坑群が存在し、これらに付随するものと考えられる。第２群は、ＳＦ90・91・95・97で、調査区中央北側にほぼ一列に並んで存在し、



第３図　遺跡周辺地形図（1:2,000）　■は試掘坑

他の焼土坑と比べて大きい。第３群は、ＳＦ100～102で、調査区北東部に固まって存在する。

ＳＦ22　長径1.6m×短径1.1mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.25mを計る。埋土には灰が混じり、直径５cm程度の礫が僅かに見られる。

ＳＦ23　長径2.5m×短径２mの楕円形を呈し、深さは0.35mを計る。0.25m程焼土が堆積しており、直径20cm程度の礫が多数含まれていた。焼土下では、赤茶褐色もしくは黄灰茶褐色に変色した層が10cm程確認されている。

ＳＦ84　長径2.4m×短径2.1mの不定形を呈する土坑で、薄く焼土が堆積していた。

ＳＦ87　ＳＦ84同様、不定形を呈し、薄く焼土が堆積する土坑で、長径2.5m×短径2.4mを計る。

ＳＦ88　長辺1.1m×短辺0.9mを呈する方形の土坑で、深さは0.3mを計る。埋土には焼土が含まれる。ＳＦ89に付随する施設と考えられる。

ＳＦ89　長径4.6m×短径１mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.3mを計る。埋土には焼土が堆積しており、直径10cm程度の礫が多数含まれている。北側には東に向かって張り出した長方形の窪みがあり、ＳＦ88に対応するものと考えられる。

ＳＦ90　長径2.6m×短径1.3mの楕円形を呈する土坑で、焼土を含み直径10cm程度の礫を僅かに含む。

ＳＦ91　長径2.6m×短径2.3mの楕円形を呈する土坑で、西側に溝状の張り出しを持つ。深さは0.4mを計る。埋土は、黄褐色砂および焼土で、直径10cm程度の礫が含まれていた。

ＳＦ95　長径4.7m×短径3.9mの不定形を呈する土坑で、深さは0.4mを計る。埋土はほとんど焼土で、直径10cm程度の礫が少し含まれる。

ＳＦ97　長径4.1m×短径3.3m以上の不定形を呈する土坑で、深さは0.1mを計る。南側をＳＫ30に、中央部分をＳＫ36・37に切られており、これら粘土坑より古い施設と考えられる。

ＳＦ100　長径1.4m×短径1.2mの楕円形を呈する土坑で、埋土に焼土や礫を含む。

ＳＦ101　長径１m×短径0.8mの楕円形を呈する土坑で、埋土に焼土や礫を含む。

ＳＦ102　長径1.6m×短径1.4mのＬ字状を呈する土坑で、埋土に焼土や礫を含む。

（２）粘土坑

ＳＫ11　一辺2.7mの隅丸方形を呈し、深さ0.6mを計る。壁面および底面に0.3m程度の粘土貼りが行われる。埋土には炭や焼土を含み、直径10cm程度の礫が多数見られる。礫はほとんどが検出面直下で確認されており、土坑廃絶時に投棄されたものと考えられる。

ＳＫ12　長辺2.5m×短辺2.2mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.5mを計る。壁面および底面に0.3m程度の粘土貼りが行われる。使用面が0.15mと極めて浅いことから、遺構の上面が削平されている可能性が高い。埋土には炭や焼土を含み、直径10cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ13　長辺3.0m×短辺2.6mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面には0.2m、底面には0.3m程度の粘土貼りが行われている。埋土には炭や焼土を含み、直径10～20cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ14　長辺2.6m×短辺2.4mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.8mを計る。壁面には0.3m、底面には0.2m程度の粘土貼りが行われている。埋土には炭や焼土を含み、直径10cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ19　長辺2.3m×短辺2.0mの隅長丸方形を呈する土坑で、深さ0.8mを計る。粘土帯内面には、作業足場であろうか、３ヶ所の張り出し部が見られる。壁面には0.2m、底面には0.3m程度の粘土貼りが行われている。粘土貼りは、まず底面に貼った後に壁面の粘土を貼り、再度底面に粘土を貼っている。土坑の底面には一部凹凸が見られることから、二度の粘土貼りは、補修の痕跡である可能性も考えられる。埋土には炭や焼土を含み、直径10cm程度の礫が若干見られる。

ＳＫ20　長辺3.0m×短辺2.8mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面には0.3m、底面には0.4m程度の粘土貼りが行われている。ＳＫ19同様、粘土帯の内側に２ヶ所に張り出し部が見られ、底面には一段のテラスが見られる。粘土は、最初に底面に貼った後、壁面と底面を一度に粘土貼りしている。埋土は若干の焼土を含み、直径10cm程度の礫が多数見られる。ここからは土師器鍋（２・４）や陶器鉢（６）、土錘（12）が出土し、16世紀後半の遺構で

第４図　池ノ上遺跡平面図（1:300）

遺構番号	地区	形態	堀方					使用面							
			上場		下場			上場		下場					
			長径	短径	長径	短径	深さ	長径	短径	長径	短径	深さ	容積(L)	分類	備考
SK11	f16	隅丸方形	2.7	2.7	2.4	2.2	0.8	2.2	2.1	1.8	1.8	0.6	2346.0	Ⅰ	
SK12	f15	隅丸方形	2.5	2.2	2.2	1.9	0.5	2.0	1.9	1.8	1.6	0.2	666.0	Ⅲ	
SK13	e14	隅丸長方形	3.0	2.6	2.6	2.3	0.7	2.6	2.3	2.4	2.0	0.3	1614.0	Ⅲ	
SK14	f14	隅丸方形	2.6	2.4	2.2	1.6	0.8	2.1	2.0	1.8	1.3	0.2	647.0	Ⅰ	
SK19	g14	隅丸長方形	2.3	2.0	1.8	2.0	0.8	2.0	1.7	1.8	1.5	0.5	1521.7	Ⅳ	
SK20	g13	隅丸長方形	3.0	2.8	2.6	2.3	0.7	2.6	2.3	2.2	1.7	0.4	1928.0	Ⅲ	
SK21	g12	隅丸長方形	2.5	2.1	2.2	1.7	0.6	2.2	1.8	2.1	1.5	0.3	1065.0	Ⅲ	
SK25	d12	隅丸方形	2.3	2.2	2.0	1.9	0.6	1.9	1.9	1.7	1.7	0.3	973.0	Ⅲ	
SK29	d11	隅丸長方形	2.2	1.9	1.9	1.6	0.8	1.8	1.4	1.4	1.1	0.5	1005.0	Ⅲ	
SK30	d10	隅丸方形	2.6	2.4	2.4	2.0	0.7	2.3	2.0	2.0	1.8	0.3	1227.0	Ⅲ	補修？
SK33	h11	隅丸長方形	3.3以上	2.5以上	―	―	0.6	(2.9)	(2.2)	(2.7)	(1.9)	0.5	2870.0	Ⅲ	SK34に切られる
SK42	c9	隅丸長方形	2.3	2.1	2.0	2.0	0.8	1.9	1.6	1.9	1.5	0.4	1178.0	Ⅱ	補修？
SK55	e9	隅丸長方形	2.6	2.3	2.0	1.8	0.6	2.3	1.9	1.9	1.3	0.6	2028.0	Ⅰ	
SK56	g9	隅丸方形	2.8	2.8	2.5	2.4	0.7	2.4	2.4	2.2	2.0	0.3	1520.0	Ⅰ	補修
SK66	g11	隅丸長方形	2.6	2.3	2.1	2.0	0.7	2.2	1.8	1.9	1.6	0.3	1047.0	Ⅲ	
SK71	g10	隅丸方形	2.8	2.4	2.4	2.1	0.6	2.4	2.1	2.2	1.9	0.4	1841.3	Ⅳ	
合計													23477.0		

第１表　粘土坑一覧表

あると考えられる。

ＳＫ21　長辺2.5m×短辺2.1mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面には0.1～0.2m、底面には0.3m程度の粘土貼りが行われている。埋土には、直径10cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ25　長辺2.3m×短辺2.2mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面には0.2m、底面には0.3m程度の粘土貼りが行われている。埋土には炭や焼土を含み、直径10cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ29　長辺2.2m×短辺1.9mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.8mを計る。壁面には0.3m、底面には0.4m程度の粘土貼りが行われている。埋土には直径10cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ30　長辺2.6m×短辺2.4mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面および底面には0.2～0.3m程度の粘土貼りが行われている。埋土には炭や焼土を含み、直径10～20cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ33　長辺3.3m以上×短辺2.5m以上の隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。遺構の東側はＳＫ34によって切られる。壁面および底面には0.2～0.3m程度の粘土貼りが行われている。埋土には炭や焼土を含み、直径10～20cm程度の礫が多数見られる。

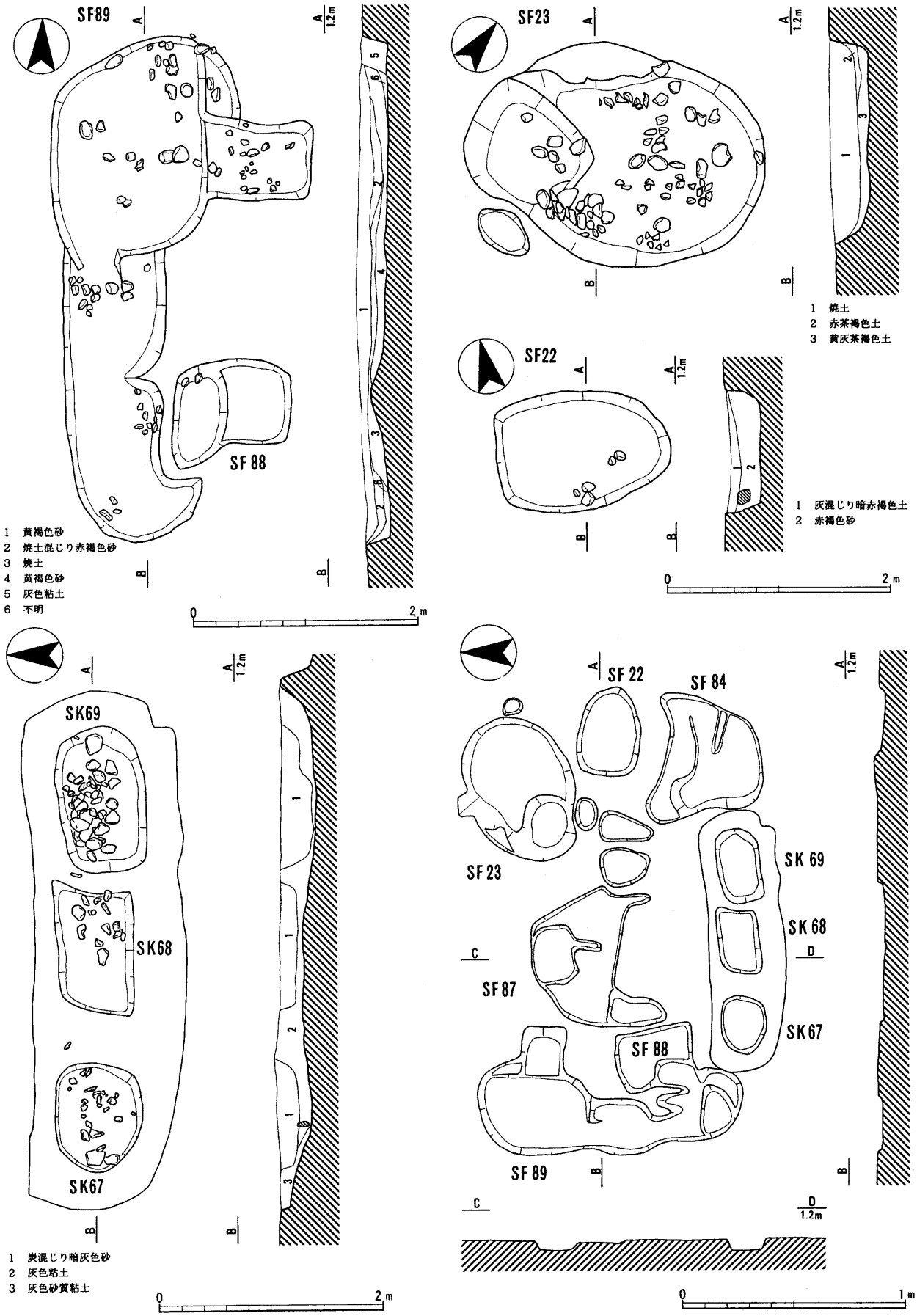
ＳＫ42　長辺2.3m以上×短辺2.1m以上の隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.8mを計る。壁面には0.2m程度の粘土貼りが行われているが、底面は粘土貼りが２度行われ、厚さは0.4mと厚い。埋土には炭や焼土を含む。

ＳＫ55　長辺2.6m以上×短辺2.3m以上の隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。粘土貼りは壁面および底面ともに0.1m程度とやや薄い。埋土には炭を含み、土坑の中央部分で直径10cm程度の礫が多数見られる。

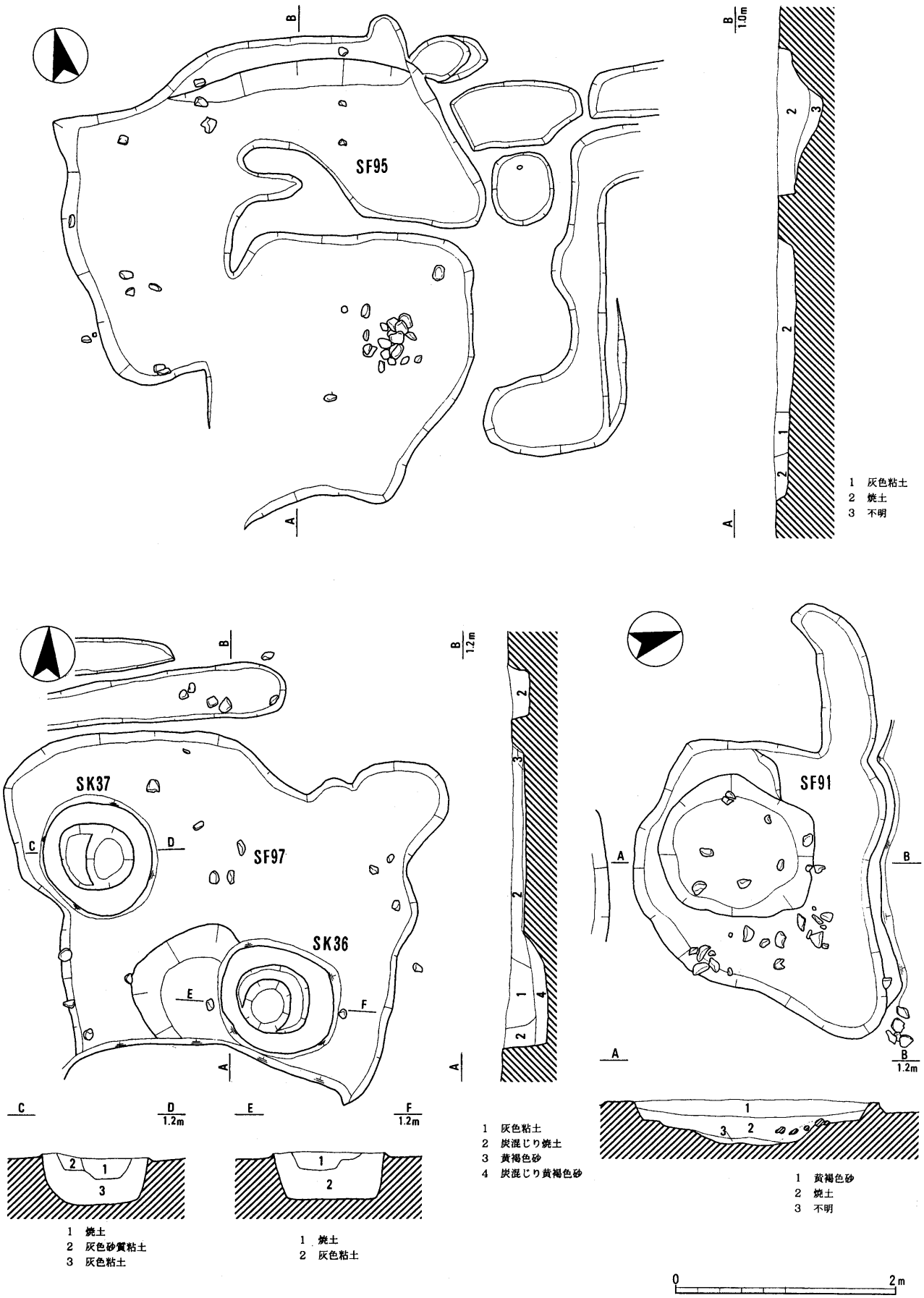
ＳＫ56　一辺2.8mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。底面の粘土貼りが３度にわたって行われていることから、２度の補修が行われたものと考えられる。最初は土層７～９の粘土が貼られ、その後土層６の淡茶褐色砂質土を挟んで土層５の粘土層によって補修が行われ、最後は壁面の土層６を削り込んで土層４の粘度を貼って使用している。土坑の規模は、補修を行う度に小さくなっている。埋土には炭や焼土を含み、直径10cm程度の礫が多数見られる。

ＳＫ66　長辺2.6m×短辺2.3mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面には0.2mの粘土貼りが、底面には0.4mと厚く粘土が貼られている。土坑中央部に、直径５cm程度の礫がまとまって見られる。

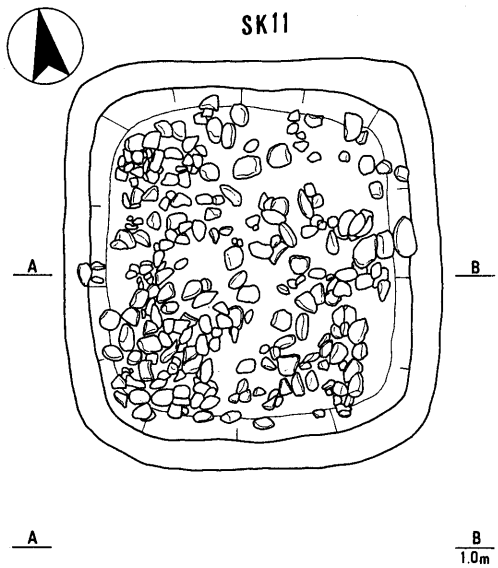
ＳＫ71　長辺2.8m×短辺2.4m以上の隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面およびには0.2～0.3m程度の粘土貼りが行われている。底面の状況から補修が行われた可能性が考えられる。埋土には炭や焼土を含み、直径10～20cm程度の礫が土坑中

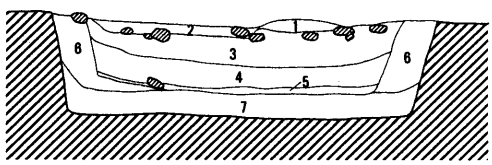


第５図　釜屋内遺構実測図（1:50）釜屋遺構配置図（1:100）

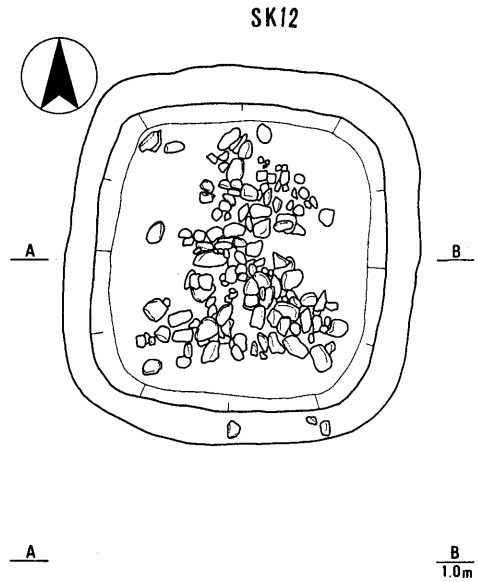


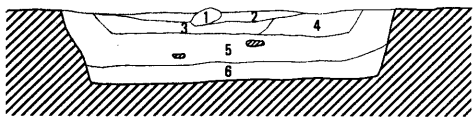
第６図　焼土坑実測図(1:50)



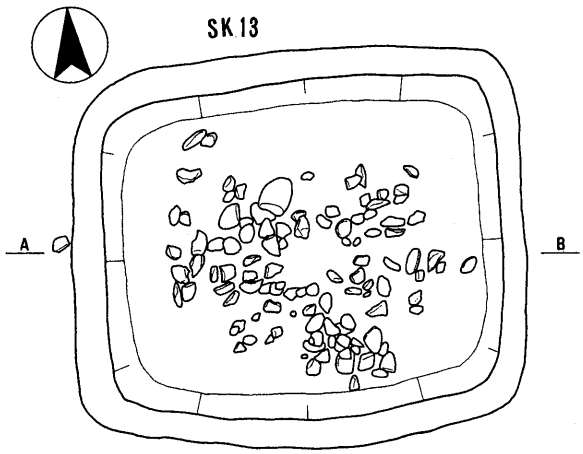


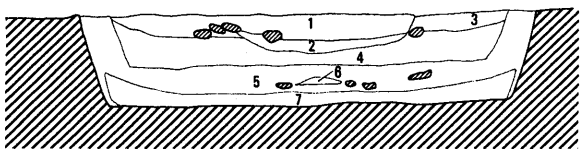
1　灰褐色粘土
2　炭混じり焼土
3　炭混じり暗褐色土
4　焼土混じり暗褐色砂
5　褐色砂
6　灰色粘土
7　青灰粘土



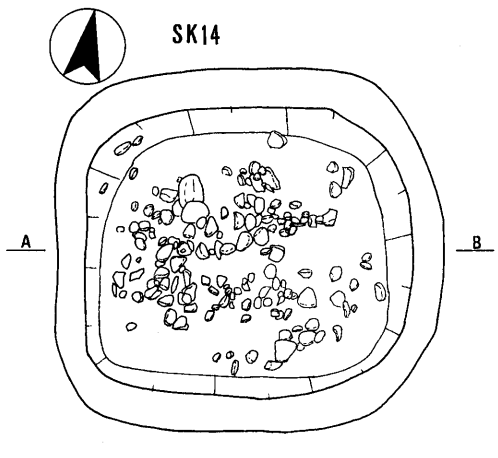


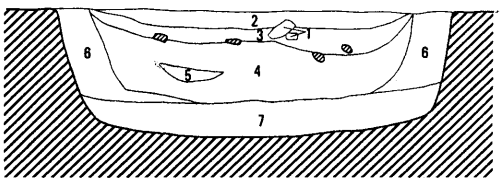
1　灰色粘土ブロック
2　灰褐色土
3　炭混じり暗褐色土
4　炭混じり暗黄褐色土
5　灰白色粘土
6　灰褐色粘土





1　灰褐色土
2　炭混じり暗褐色土
3　炭混じり暗黄褐色土
4　焼土混じり暗褐色砂
5　灰白色粘土
6　炭混じり暗茶褐色粗砂
7　灰褐色粘土

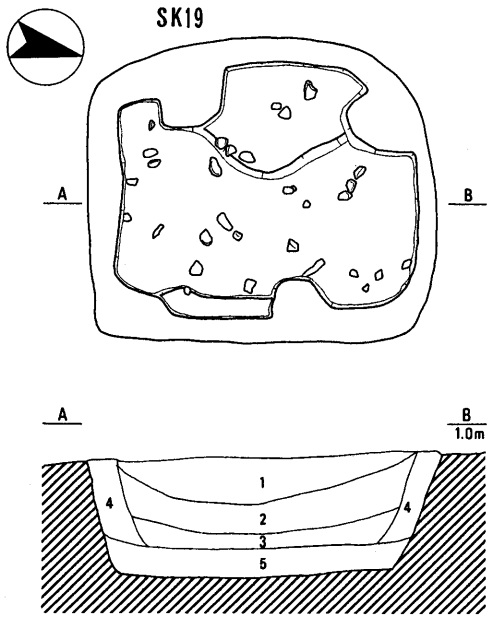




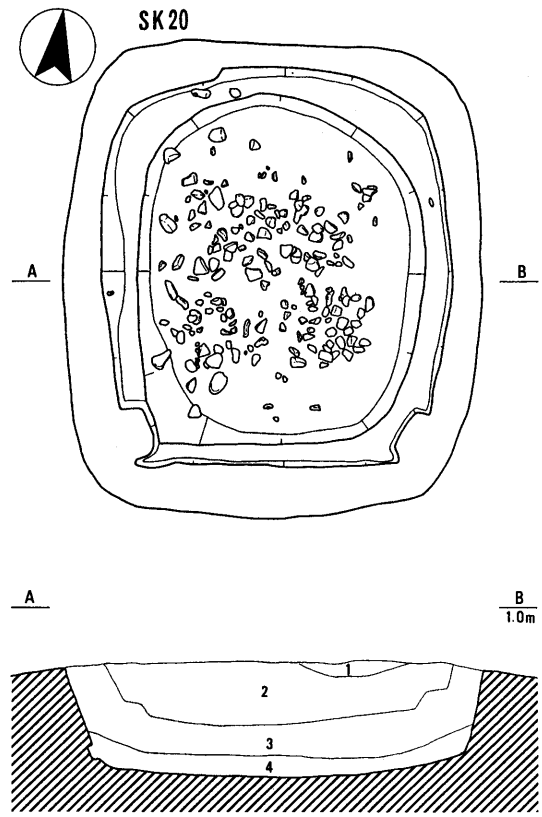
1　粘土ブロック
2　焼土混じり灰褐色土
3　炭混じり暗灰褐色土
4　明灰色粘土
5　暗褐色砂
6　灰白色粘土
7　青灰色粘土

0　2m

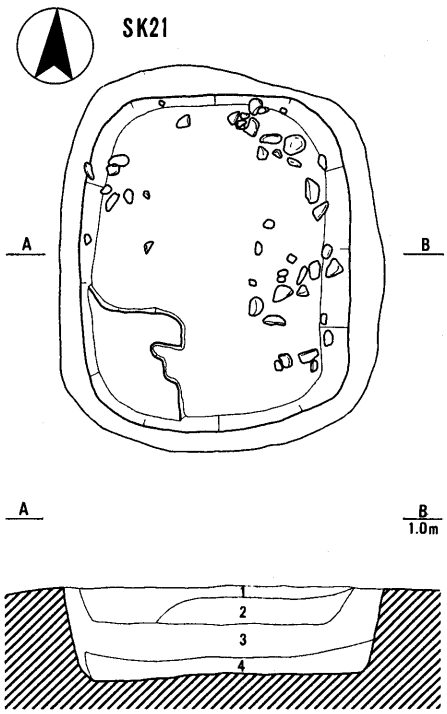
第７図　粘土坑実測図(1)（1:50）



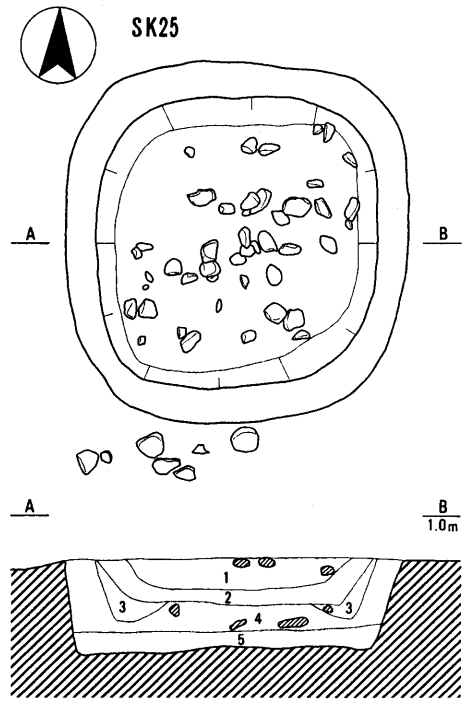
1　炭混じり褐色土
2　炭混じり暗褐色土
3　灰色粘土
4　灰白色粘土
5　青灰色粘土



1　焼土
2　黄茶褐色土
3　灰白色粘土
4　灰褐色粘土



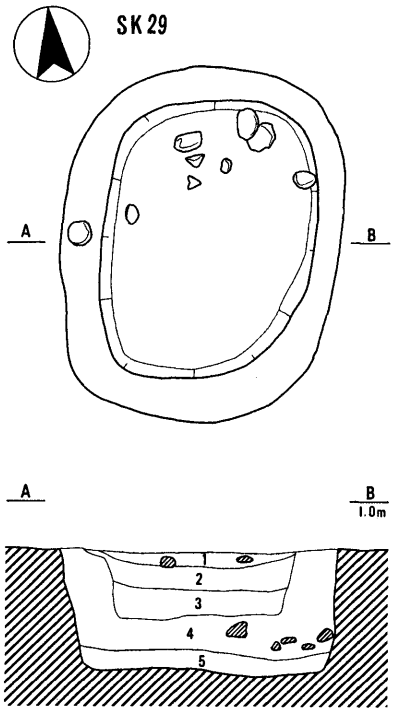
1　黄褐色砂
2　茶褐色砂
3　灰白色粘土
4　茶褐色粘土



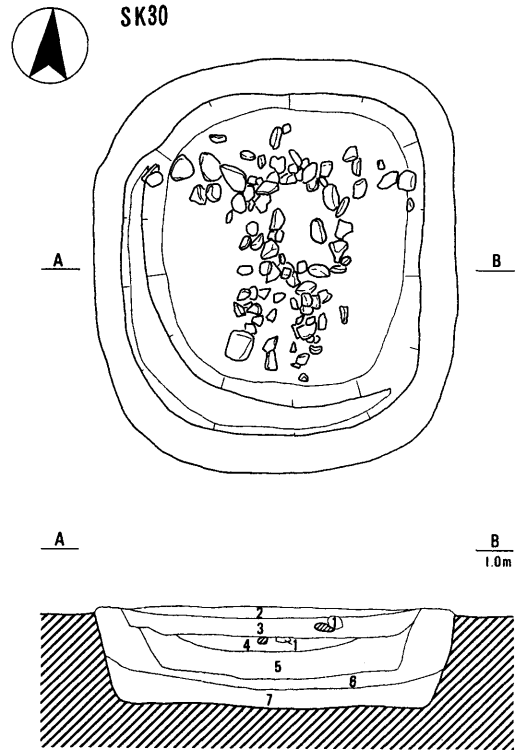
1　炭混じり焼土
2　炭混じり暗褐色土
3　黄茶褐色粗砂
4　灰色粘土
5　青灰色粘土

0　2 m

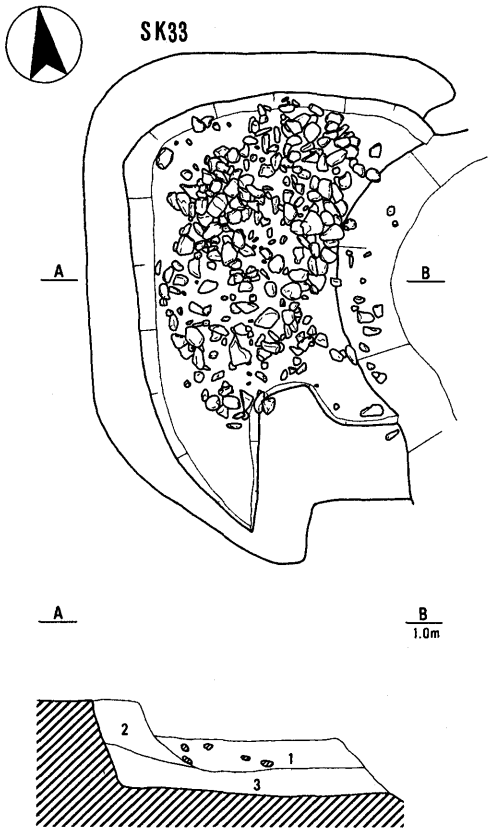
第８図　粘土坑実測図(2)（1:50）



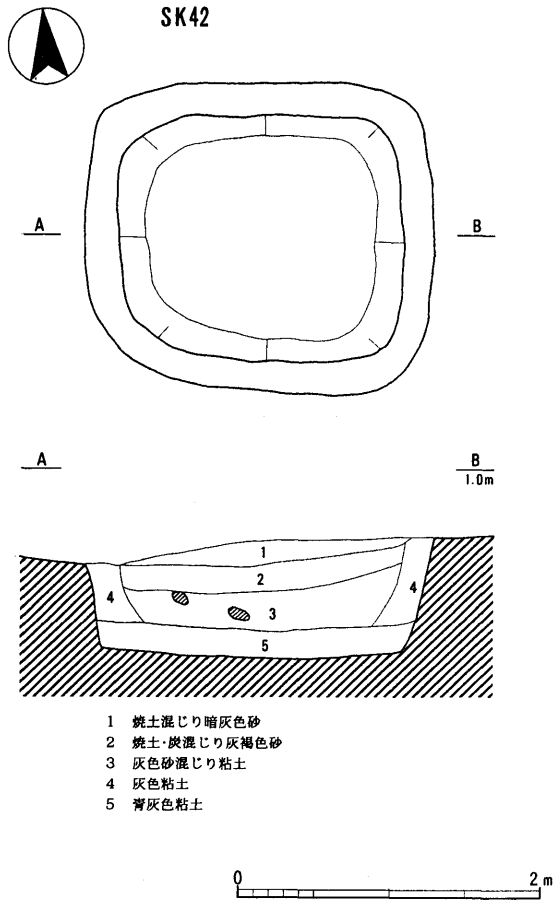
1　黄褐色砂質土
2　暗褐色土
3　粘土混じり灰褐色粗砂
4　灰色砂質粘土
5　青灰色粘土



1　粘土ブロック
2　黄褐色砂
3　焼土・炭混じり赤褐色土
4　灰茶褐色粗砂
5　灰褐色砂質粘土
6　灰色砂質粘土
7　青灰色粘土

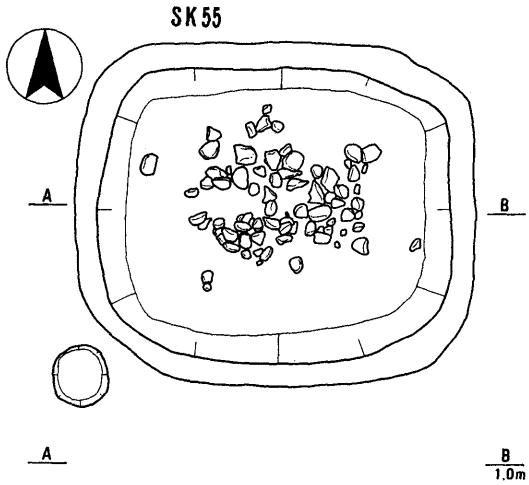


1　灰色粘土混じり粗砂
2　灰色砂質粘土
3　青灰色粘土

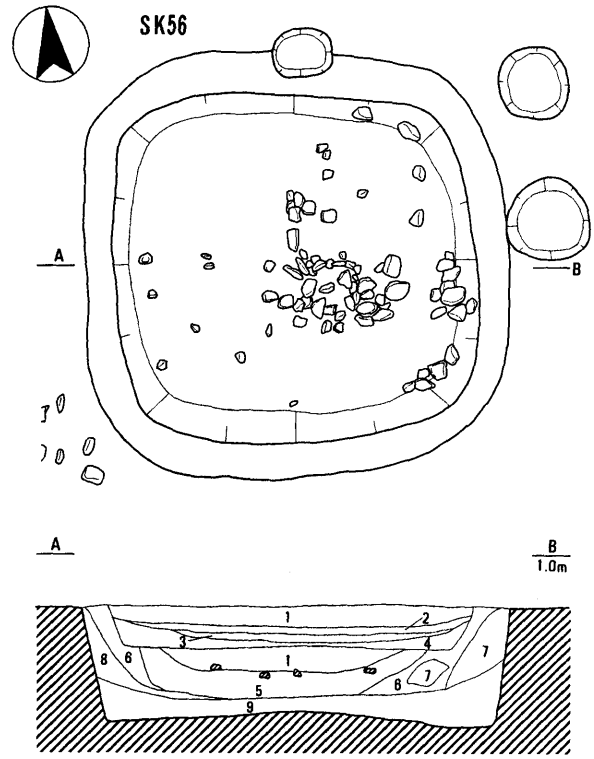


1　焼土混じり暗灰色砂
2　焼土・炭混じり灰褐色砂
3　灰色砂混じり粘土
4　灰色粘土
5　青灰色粘土

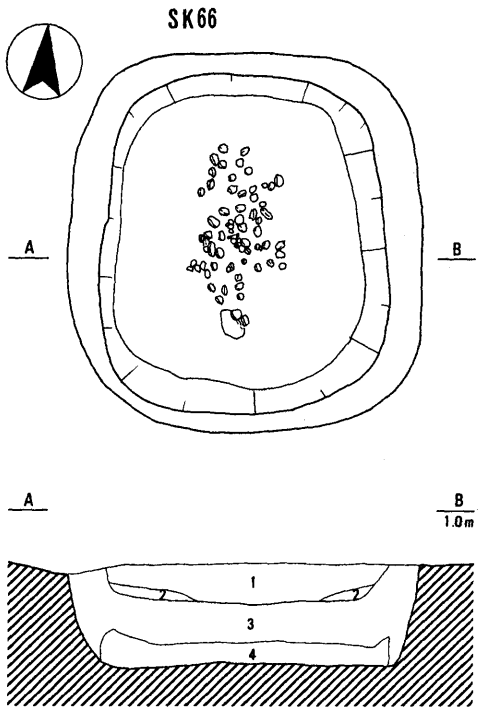
第９図　粘土坑実測図(3)（1:50）



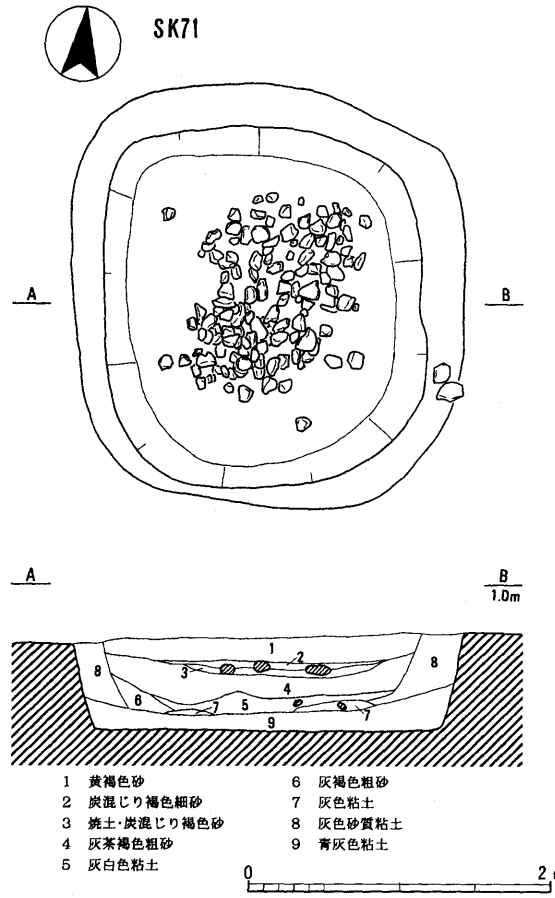
1　黄褐色砂
2　炭混じり暗褐色土
3　灰褐色粘土
4　粘土混じり暗黄褐色土
5　茶褐色粗砂
6　灰色砂質粘土



1　黄褐色砂質土
2　暗褐色砂
3　焼土・炭混じり褐色砂
4　炭混じり暗灰色粘土
5　灰褐色粘土
6　淡茶褐色砂質土
7　灰白色粘質土
8　灰褐色粘質土
9　青灰色粘土



1　黄褐色砂
2　黄茶褐色細砂
3　灰白色粘土
4　青灰褐色粘土



1　黄褐色砂
2　炭混じり褐色細砂
3　焼土・炭混じり褐色砂
4　灰茶褐色粗砂
5　灰白色粘土
6　灰褐色粗砂
7　灰色粘土
8　灰色砂質粘土
9　青灰色粘土

第 10 図　粘土坑実測図(4)（1:50）

遺構番号	地区	形態	堀方			使用面				備考
			長径（直径）	短径	深さ	長径（直径）	短径	深さ	容量(L)	
SK36	d11	円形	1.0	1.0	0.2	0.6	0.5	0.2	47.1	
SK37	c11・d11	円形	1.2	1.0	0.4	0.7	0.6	0.2	65.9	
SK67	f11	楕円形	4.7	1.2～1.4	0.2～0.4	1.0	0.8	0.2	125.6	
SK68	f11・f12	長方形	―	―	―	1.0	0.7	0.2	140.0	
SK69	f12	長方形	―	―	―	1.3	0.8	0.3	180.3	
合　計									558.9	

第２表　小粘土坑一覧表

央部にまとまって見られる。土師器鍋（３）が出土している。

（３）小粘土坑

ＳＫ36　直径１ｍの円形を呈する土坑で、壁面には0.2m程度の粘土貼りが行われている。使用面の深さはおよそ0.2mである。

ＳＫ37　直径１ｍの円形を呈する土坑で、壁面には0.2m程度の粘土貼りが行われている。内面は１段のテラスを持ち、使用面の最深部は0.2mを計る。ＳＫ36同様、ＳＦ97を切る遺構である。

ＳＫ67　ＳＫ67～69は、共有する粘土貼りを持つ一連の土坑群で、焼土坑第１群に付随する施設と考えられる。粘土貼り部の堀方は長径4.7m、短径は1.1～1.4m、深さは0.2～0.3mを計る。ＳＫ67の使用面は、長径1.0m×短径0.8mの楕円形を呈し、深さは0.2mを計る。内部には直径10cm程度の礫が見られる。

ＳＫ68　使用面は、長辺1。1m×短辺0.7mの長方形を呈し、深さは0.15mを計る。内部には直径10cm程度の礫が見られる。

ＳＫ69　使用面は、長辺1.3m×短辺0.8mの長方形を呈し、深さは0.3mを計る。内部には直径20cm程度の礫が多数見られる。

（４）土坑

ＳＫ31　長径1.7m×短径1.1mの不定形を呈する土坑で、両脇に浅いテラスを持つ。形状から、小粘土坑に類する遺構の可能性も考えられる。

ＳＫ34　長径3.2m×短径2.6mの楕円形を呈する。切り合い関係から、ＳＫ33より後出する。陶器甕（９）・磁器椀（10・11）が出土しており、近世後期の遺と考えられる。

ＳＫ98　使用面は、長辺0.9m×短辺0.6mの長方形を呈する。深さは0.2mでテラスを持ち、最深部は0.3mを計る。

ＳＫ99　長辺1.3m×短辺0.8mの長方形を呈し、深さは0.3mを計る。内部には直径20cm程度の礫が多数見られる。ＳＫ98・99は形状から考えて、小粘土坑に類する可能性も考えられる。

（５）その他の遺構

土坑以外の遺構については、調査区北東部や調査区中央部、調査区西端において、溝やピット列が見られる。これらの遺構は、近世の耕作に関するものと考えられ、区画のための溝や柵列と思われる。出土遺物は無く、詳しい時期は不明であるが、切り合い関係から土坑群より後出するものであろう。

３　遺物

ＳＫ20出土遺物　土師器鍋（２・４）・陶器鉢（６）・土錘（12）が出土している。土錘を除き、遺物はいずれも小片である。土師器鍋は南伊勢系鍋で、４は伊藤編年[1]第４段階のものと考えられる。

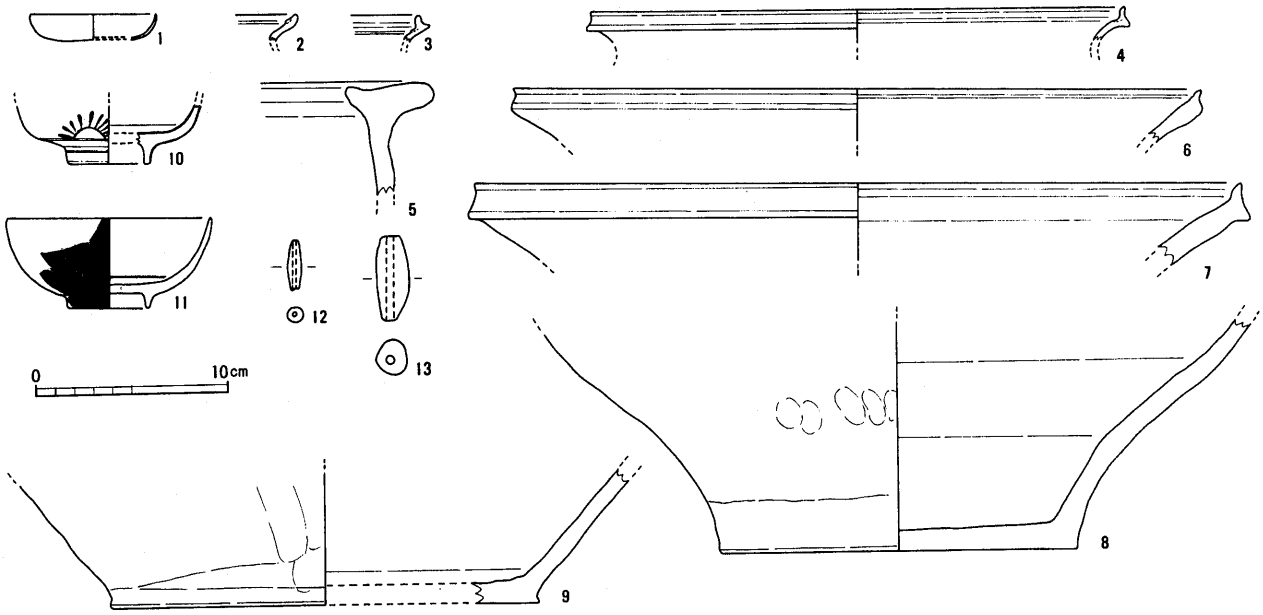
ＳＫ34出土遺物　陶器甕（９）・陶磁器椀（10・11）が出土している。10・11ともに内外面に染付が施される。

ＳＫ65出土遺物　土師器鍋（５）・陶器甕（８）が出土している。土師器鍋は器壁が厚く、粗製である。陶器甕は常滑産の大甕の底部である。

その他の出土遺物　１はＳＤ67から出土したもので、南伊勢系の土師器皿。３は南伊勢系の土師器鍋で伊藤編年の第４段階にあたる。７は陶器鉢。表土中に採集したものである。13は土錘で、ＳＢ19より出土している。

４　結語

池ノ上遺跡では、調査区中央の焼土坑群を中心に、16基の粘土坑と５基の小粘土坑が確認された。遺跡の所在する黒部地区周辺には、櫛田川によって発達した遠浅の自然浜が広がっており、古くから製塩活



第11図　遺物実測図（1:4）

動が行われていたことが知られている。池ノ上遺跡も、こうした製塩に関わる遺構群と考えられる。

粘土坑は、土坑の壁面や底面を丹念に粘土貼りを行って保水能力を高めたもので、「鹹水槽」であると考えられる。これらは、周囲の塩浜で採集された鹹水を一時的に貯蔵し、また天日によって、さらに鹹水の濃度を高めていたものであろう。粘土の貼り方については大きく分けて、底面を貼ってから壁面を貼るもの［Ⅰ］、壁面を貼ってから底面を貼るもの［Ⅱ］、底面を貼った後に壁面と底面を貼るもの［Ⅲ］、底面を貼った後に壁面を貼り、更に底面を貼るものに分けられる。鹹水槽は底面の粘土貼りを２重にした分類Ⅲ・Ⅳが多く見られる。これは、鹹水槽の保水効果を高めるためのものと考えられる。しかし、中にはＳＫ53のように粘土貼りを何度も行い、度々補修を行っていたものもあり、分類Ⅳの鹹水槽については、保水効果を高めるために当初より粘土貼りを二重に行っていたものの他に、底面を補修したものも含まれる可能性が考えらる。

鹹水槽群に囲まれた中央の焼土坑群は、煎傲を行った釜屋と考えられる。釜屋はおよそ10×７ｍの範囲で、焼土坑の配置から、左右に３基、中央に１基の、合計７基程度の竈が存在していたものと想定される[2]。釜屋周辺の鹹水槽には多数の礫や粘土ブロックが見られることから、竈は石や粘土を用いて構築されていたと考えられ、礫や粘土ブロックは竈廃絶時に投棄されたものであろう。また、隣接するＳＫ67～69の小粘土坑は、釜屋内の施設と思われ、濃縮した鹹水を一時的に保管するためのものか、煎傲課程で出来たにがりを貯蔵するためのものではないかと考えられる[3]。ＳＫ36・37などの小粘土坑や、粘土貼りは確認できなかったものの、ＳＫ98・99についても、同様の機能であったと考えられる。また、ＳＦ90・91・95・97で構成される焼土群についても、明確な範囲は規定できないが、釜屋が存在していたものであろう。これらの焼土群は、ＳＫ42やＳＫ30の鹹水槽に切られることから、鹹水槽群より先行するものと考えられる。

製塩遺跡は、釜場と鹹水槽で構成される製塩場と、塩浜や塩田などの採鹹場から成り立っている。池ノ上遺跡の周辺には、櫛田川河口に発達した遠浅の自然浜が広がっており、こうした自然浜を利用した塩浜で採鹹を行っていたものと考えられる。調査区西半の空閑地も、塩浜になるものであろう。製塩場は調査区中央の釜屋とそれを囲むように配置された鹹水槽で構成されている。鹹水槽は整然と配置され、大きさにばらつきがあるものの、ほぼ隅丸長方形を呈し、規格的につくられた事が窺える。容量は上面が削平を受けているため詳細はわからないが、およそ650Ｌ～2,800Ｌの容量があり、ここでは合計23,500Ｌの貯蔵が可能である。さらに北側には、これらに先行する焼土坑群があり、調査区北側にもこうした

番号	登録番号	種別器形	グリッド遺構・層	計測値(cm)	調整	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	006-10	土師器 皿	ＳＤ67	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	小片	
2	002-04	土師器 鍋	ＳＫ20	－	ナデ	密	やや良	灰黄褐	小片	外面煤付着
3	006-02	土師器 鍋	ＳＫ71	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	小片	
4	002-05	土師器 鍋	ＳＫ20	－	ナデ	密	良	浅黄橙	小片	外面煤付着
5	004-08	土師器 鍋	ＳＫ65	－	ナデ	密	良	赤	小片	
6	002-01	陶器 擂鉢	ＳＫ20	－	ナデ、錆釉	密	良	黒	小片	
7	001-01	陶器 擂鉢	表土	－	ナデ、錆釉	密	良	橙	小片	
8	005-01	陶器 甕	ＳＫ65	－	ナデ、錆釉	密	良	赤	底部2/3	
9	003-01	陶器 甕	ＳＫ34	－	ナデ	密	良	淡黄	底部1/6	
10	003-06	陶磁器 椀	ＳＫ34	－	染付	密	良	灰白	小片	
11	003-07	陶磁器 椀	ＳＫ34	－	染付	密	良	灰白	1/6	
12	002-02	土錘	ＳＫ20	長さ： 2.5cm 幅 ： 0.8cm	ナデ	密	やや良	橙	完形	
13	006-12	土錘	ＳＢ19	長さ： 4.5cm 幅 ： 1.7cm	ナデ	密	やや良	浅黄	完形	

第３表　遺物観察表

鹹水槽が広がる可能性も考えられる。

遺跡の時期については、出土遺物が極めて少ないため決定は困難であるが、ＳＫ20の出土遺物から16世紀代には存在していたものと考えられる。また、ＳＫ33を切るＳＫ34からは、常滑産の大甕や陶器椀染付が出土しており、近世後期には廃絶していたものと考えられる。

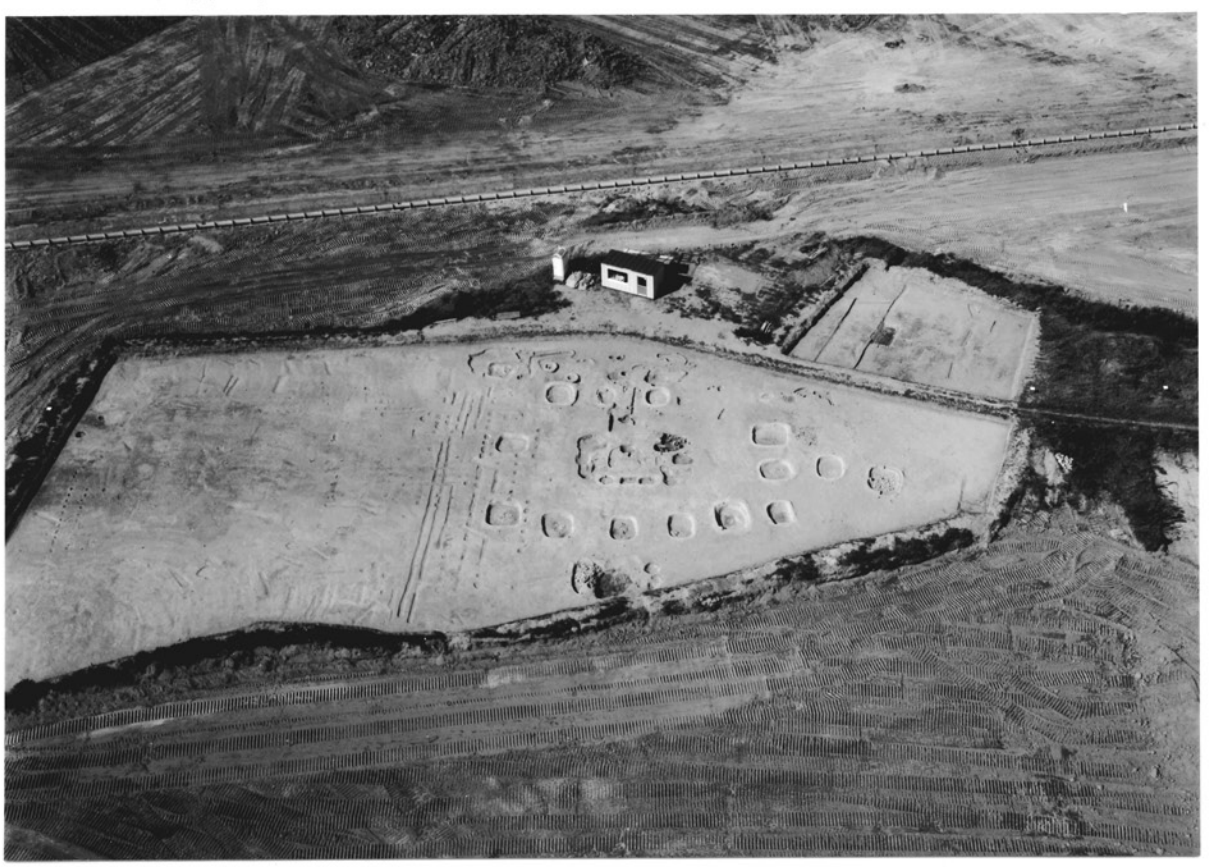
【註】

(1)伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol.1、三重歴史文化研究会、1990

(2)焼土坑の全てが竈になるかどうかは不明。現地を実見して頂いた宇野隆夫氏によると、これらのうち２基は竈として想定できるとした。

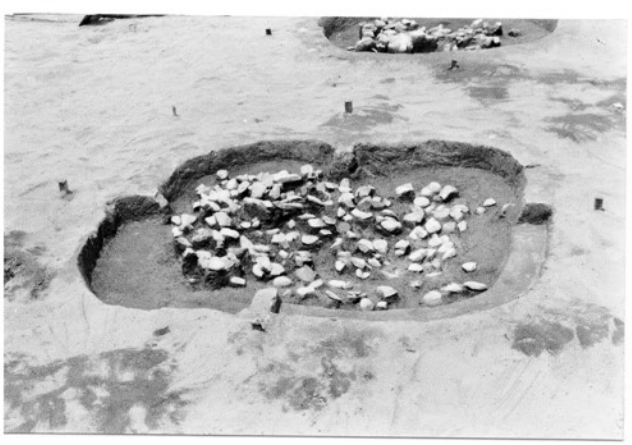
(3)宇野氏の御教示による。

池ノ上遺跡遠景（南から）



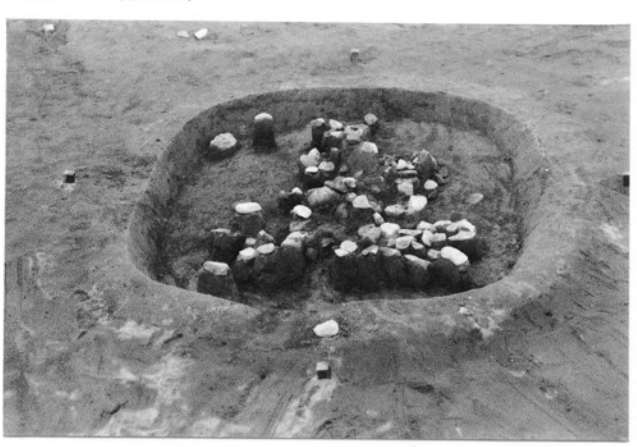
池ノ上遺跡全景（南から）

釜屋跡（西から）



ＳＫ１１（東から）

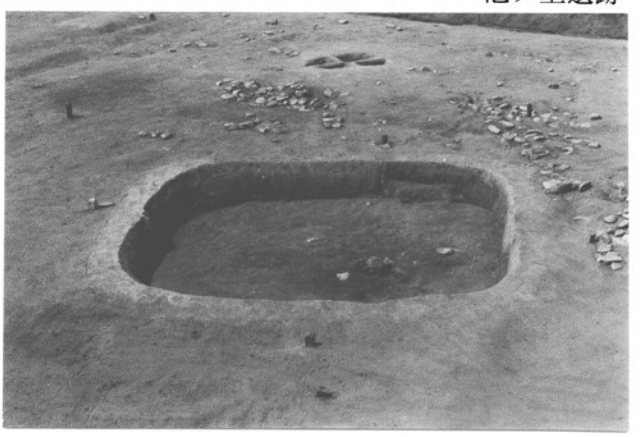
ＳＫ１４（南から）



ＳＫ１２（南から）

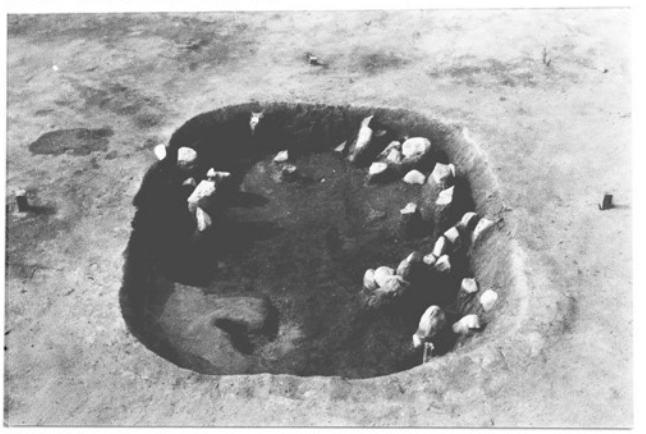
ＳＫ１２完掘状況（南から）

ＳＫ１３（西から）

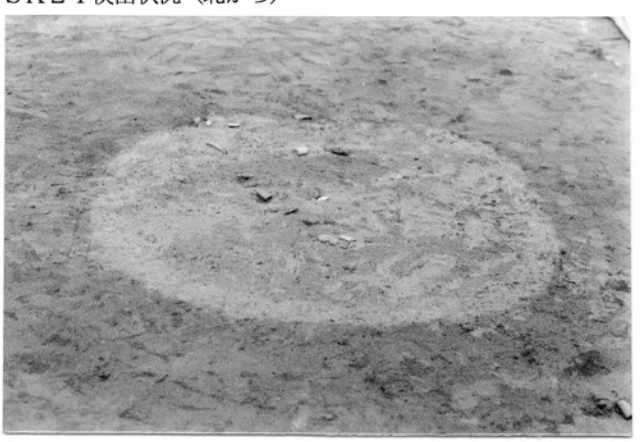


ＳＫ１３完掘状況（南から）

ＳＫ２１検出状況（北から）



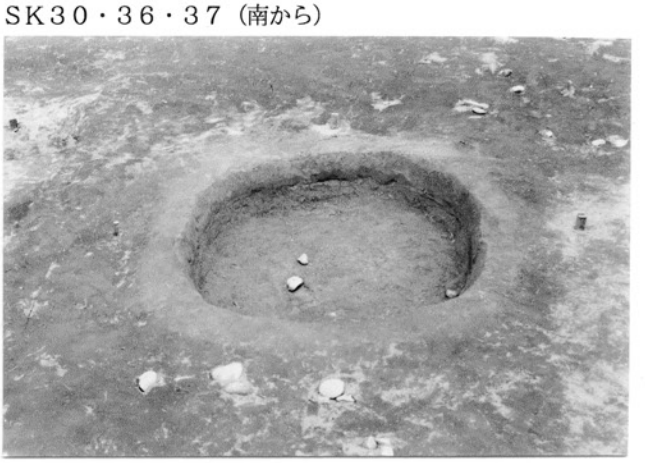
ＳＫ２１（南から）



ＳＫ３０検出状況（南から）

ＳＫ３０・３６・３７（南から）

ＳＫ５６（南から）



ＳＫ６６（南から）

Ⅳ　小狐遺跡

1　はじめに

小狐遺跡は、松阪市西黒部町小狐に所在する。今回発掘調査を行った部分は、ほ場整備事業によって改変を受ける微高地部分で、現況は畑地である。発掘調査面積は1,100㎡で、平成４年９月28日から同年12月３日まで行われた。

2　遺構

本遺跡は池ノ上遺跡の北約150mに位置している。調査区は標高１m前後の微高地で、周囲を標高0.2～0.3mの水田に囲まれている。かつて、耕作時には焼け石が多数出土したことが伝わっている。

遺構面は、耕土直下で確認した。遺構は、池ノ上遺跡同様、粘土貼りが施された大小の土坑が調査区全面に確認されている。いずれも出土遺物は極めて少なく、遺構時期の決定は困難であった。

(1)粘土坑

ＳＫ１　堀方は、長辺3.4m×短辺3.0mの隅丸長方形を呈し、深さはおよそ1.0mを計る。壁面には0.2～0.4mの、底面には0.6mの粘土貼りが行なわれている。底面は４度にわたる粘土貼りが行なわれ、壁面の粘土層８を底面の粘土層６・７が切っていることから、２～３度の補修を行っていたと考えられる。埋土には炭や粘土ブロックを含む。

ＳＫ２　長辺3.4m×短辺2.8mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.8mを計る。壁面には0.3～0.4mの、底面には0.5mの粘土貼りが行われる。底面は中央部が一段低くなり、５層の粘土貼りが見られることから、後に粘土坑を大きく造り替えた可能性が考えられる。埋土には炭や粘土ブロックを含む。

ＳＫ３　一辺3.0mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面には0.2～0.4m程度の、底面には0.2～0.3m粘土貼りが行われる。埋土には炭や粘土ブロック、礫が僅かに見られる。

ＳＫ４　長辺4.0m×短辺3.6mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面には0.3～0.8mの、底面には0.１m粘土貼りが行われる。この土坑は、ＳＫ５にほぼ重複してつくられており、ＳＫ５

第12図　遺跡周辺地形図（1:2,000）　■は試掘坑

遺構番号	地区	形態	堀方					使用面							
			上場		下場			上場		下場					
			長径	短径	長径	短径	深さ	長径	短径	長径	短径	深さ	容積(L)	分類	備考
SK1	e12・f12	隅丸長方形	3.4	3.0	3.0	2.6	1.0	2.7	2.6	2.0	1.9	0.3	1598.5	V	補修
SK2	e13	隅丸長方形	3.4	2.8	3.0	2.4	0.8	2.4	1.9	2.0	1.4	0.3	1094.0	V	改築
SK3	d11	隅丸方形	3.0	3.0	2.7	2.4	0.6	2.5	2.4	1.9	1.9	0.4	1902.0	V	
SK4	c11	隅丸長方形	4.0	3.6	3.6	3.3	0.5	3.8	2.9	2.4	1.6	0.3	2138.0	V	改築
SK5	c11	隅丸長方形	—	—	3.9	3.1	0.7	3.3	2.9	2.3	2.0	0.3	2080.5	V	SK4と重複
SK9	e10・f10	隅丸長方形	3.6	3.2	3.2	2.6	0.8	3.0	2.6	2.4	2.0	0.4	2496.0	V	補修？
SK17	e9	隅丸長方形	4.5	3.7	3.8	2.9	0.7	3.9	3.2	2.6	2.1	0.5	4365.8	II	
SK21	d10	楕円形	4.7	4.2	4.3	3.4	0.9	3.7	4.1	3.6	3.3	0.7	9458.2	I	
SK24	e11・f11	隅丸長方形	3.8	3.0	3.3	2.7	0.7	3.3	2.5	2.5	1.8	0.5	3140.8	V	改築？
SK30	d7	隅丸長方形	4.0	3.7	3.4	3.3	0.6	3.4	3.2	2.5	2.4	0.3	2496.0	V	改築？
SK33	d5	隅丸長方形	4.0	3.3	3.6	3.0	0.7	3.3	2.5	2.6	2.0	0.4	2666.7	V	
SK34	d4	隅丸長方形	3.9	3.0	3.3	2.6	0.7	3.0	2.1	1.9	1.9	0.4	1967.3	IV	補修？
SK45	f2・f3	隅丸長方形	3.6	3.2	3.3	3.0	0.6	2.9	2.6	2.4	1.9	0.3	1797.5	V	
SK48	d2・e2	隅丸長方形	3.8	3.3	3.5	3.1	0.5	3.3	2.9	2.8	2.6	0.3	2520.0	IV	
SK49	d3・e3	隅丸長方形	3.1	2.8	2.8	2.5	0.6	2.6	2.4	2.2	2.0	0.4	2117.3	V	補修
SK50	d2	隅丸長方形	3.6	3.3	3.4	2.9	0.7	3.0	2.4	2.4	1.8	0.5	2850.0	IV	
SK52	c3・d3	楕円形	3.7	3.6	3.4	3.3	0.6	2.8	2.8	2.1	2.0	0.4	2370.7	IV	改築
SK55	c2	隅丸長方形	3.3	2.8	3.0	2.5	0.6	2.6	2.2	2.2	1.7	0.4	1878.7	IV	
SK58	g3・h3	隅丸長方形	4.2	3.6	3.8	3.1	0.7	3.5	2.9	2.5	2.3	0.4	3140.0	IV	五輪塔出土
SK59	g4～h5	楕円形	4.4	3.7	4.1	3.4	0.6	3.5	3.0	2.8	2.5	0.4	3476.7	V	
SK77	e7	楕円形	4.3	3.9	—	—	0.5	4.0	3.7	3.6	3.2	—	—	—	一部削平
合　計													55554.7		

第４表　粘土坑一覧表

を改築したものとも考えられる。埋土には炭を含み、直径10～20cm程度の礫が多数見られる。陶器甕(８)や捏鉢(９)が出土している。

ＳＫ５　ＳＫ４に切られているため、正確な大きさは不明であるが、堀方の底面から考えて、ＳＫ４とほぼ同じ大きさであると考えられる。堀方の深さは0.7mを計る。

ＳＫ９　長辺3.0m×短辺3.2mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.8mを計る。壁面には0.2～0.3m程度の、底面には0.4mの粘土貼りが行われている。底面は３層の粘土貼りが見られることから、補修された可能性が考えられる。埋土には炭・焼土の他に、灰色粘土ブロックが多数見られる。

ＳＫ17　長辺4.5m×短辺3.7mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面には0.2～0.4mの、底面には0.1～0.3mの粘土貼りが行われている。埋土には炭や焼土、灰色粘土ブロックが混じる。

ＳＫ21　長径4.7m×短径4.2mの楕円形を呈する土坑で、深さ0.9mを計る。壁面および底面には0.2mの粘土貼りが行われる。底面には５層の粘土貼りが見られる。埋土には炭や粘土ブロックを含む。土師器皿(１)が出土。

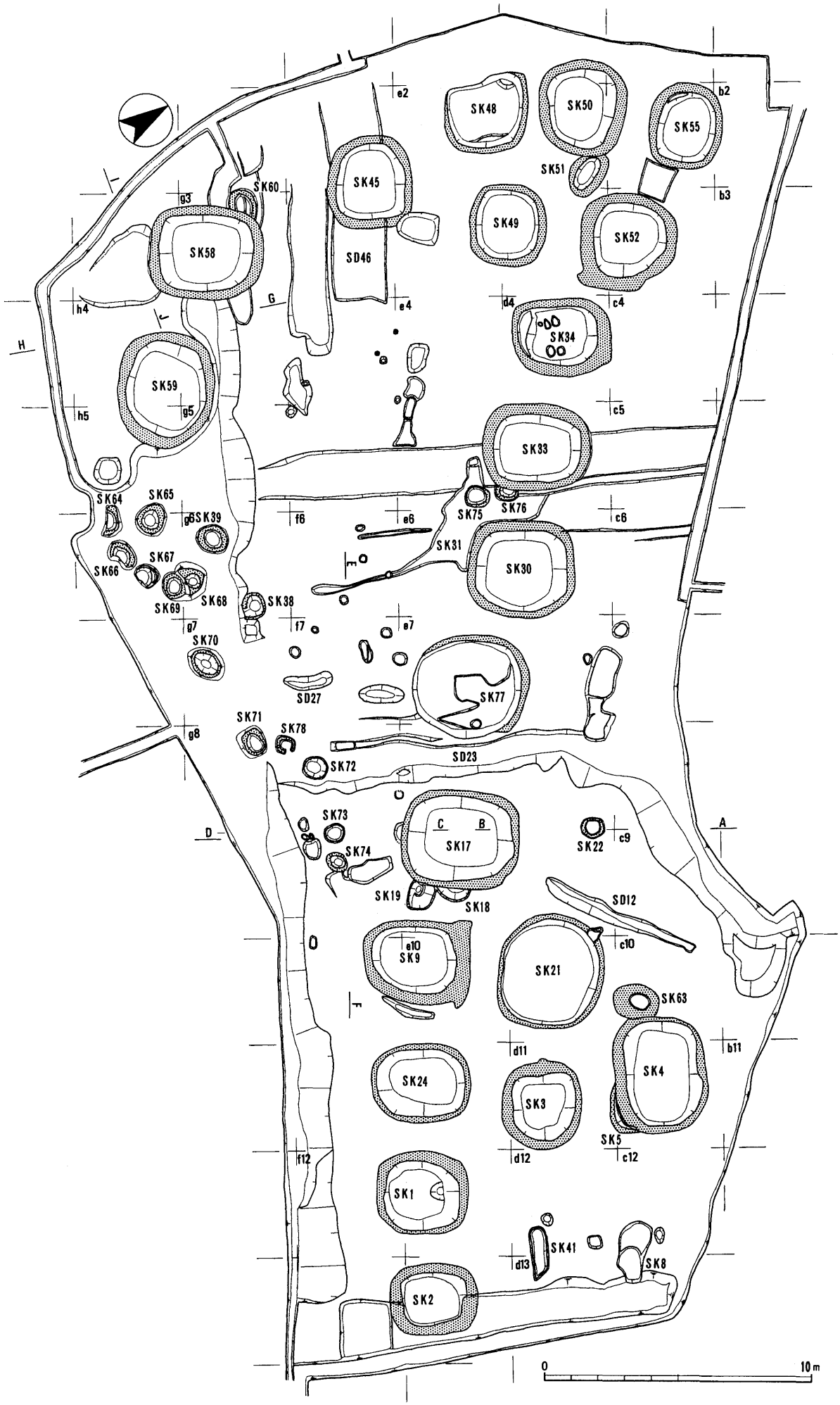
ＳＫ24　長辺3.8m×短辺3.0mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面および底面には0.2～0.4mの粘土貼りが行われる。底面には一段低くなった部分が見られ、３～４層の粘土層が見られる。埋土には炭や焼土、粘土ブロックを含む。

ＳＫ30　長辺4.0m×短辺3.7mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面0.2～0.4mの、底面には0.3mの粘土貼りが行われる。底面には一段低くなった部分が見られ、３～４層の粘土層が見られる。埋土には炭や焼土、粘土ブロックを含む。

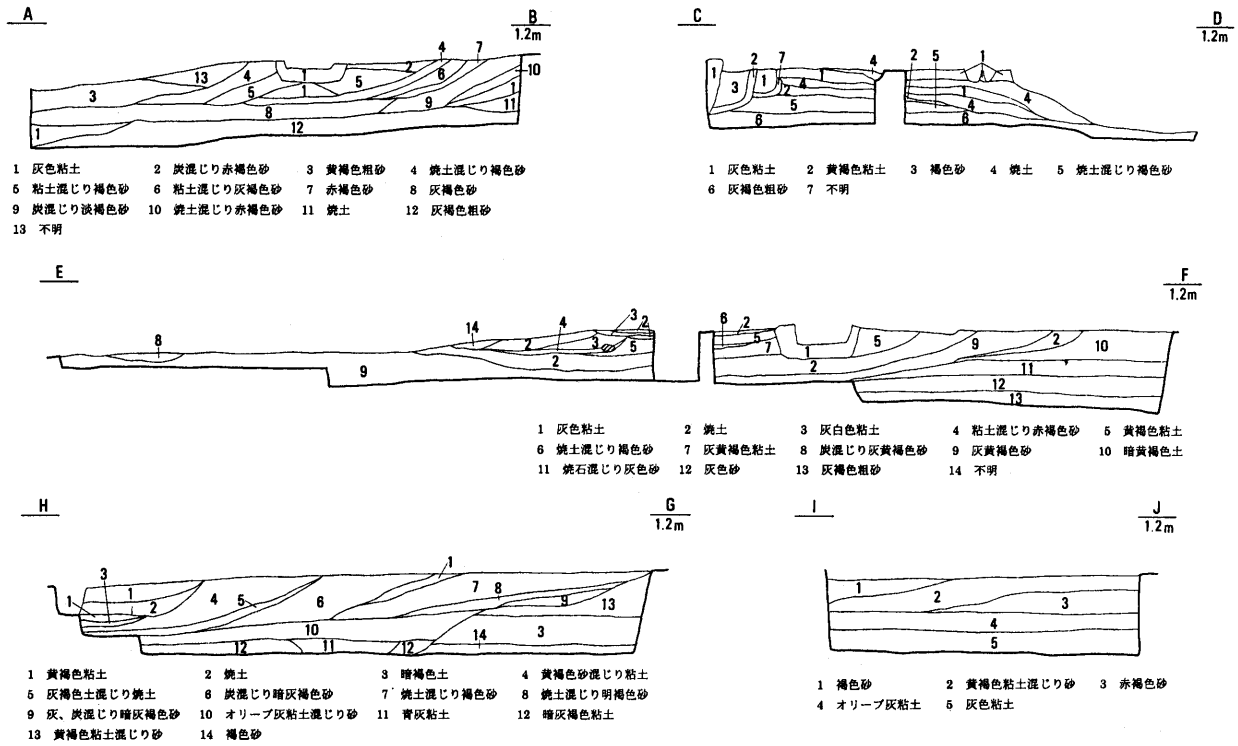
ＳＫ33　長辺4.0m×短辺3.3mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面0.4～0.5mの、底面には0.2～0.3mの粘土貼りが行われる。他の土坑と比べて粘土貼りが厚く、底面は４層も粘土層が見られるなど、丹念につくられている。陶器皿(２)や土師器皿(３)・鍋(４)が出土している。

ＳＫ34　長辺3.9m×短辺3.3mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面0.2～0.5mの、底面には0.3mの粘土貼りが行われる。壁面には二重の粘土貼りが行われており、補修が行われた可能性が考えられる

ＳＫ45　長辺3.6m×短辺3.2mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面は0.2～0.3mの、底面には0.2mの粘土貼りが行われる。埋土には直径20～30cmの礫や粘土ブロックが多数見られる。五輪塔(23・25～28)が出土している。



第13図　小狐遺跡平面図（1:200）



第 14 図　土層断面図

ＳＫ48　長辺3.8m×短辺3.3mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.5mを計る。遺構の北側は削平を受ける。壁面および底面には0.2～0.3mの粘土貼りが行われる。埋土には直径10～20cm程度の礫や粘土ブロックが少し見られる。

ＳＫ49　長辺3.1m×短辺2.8mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面および底面には0.2～0.3mの粘土貼りが行われる。底面には５層の粘土貼りが行われている。陶器甕(7)が出土。

ＳＫ50　長辺3.6m×短辺3.3mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面0.3～0.5mの、底面には0.2mの粘土貼りが行われる。埋土には直径20cm礫が僅かに見られる。

ＳＫ52　長径3.7m×短径3.6mの楕円形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面0.3～0.8mの粘土貼りが行われる。遺構の南東部には、粘土の張り出し部が見られる。底面は、0.2～0.3mの粘土貼りが行われているが、一段低くなる部分が見られ、また一部粘土帯を切る形で粘土が張り直されている。こうしたことから、この土坑は、改築が行われたものと考えられる。

ＳＫ55　長辺3.3m×短辺2.8mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面には0.3～0.4mの、底面には0.2mの粘土貼りが行われる。埋土には直径20cm程度の粘土ブロックが見られる。

ＳＫ58　長辺4.2m×短辺3.6mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さ0.7mを計る。壁面0.3～0.4mの、底面には0.2～0.3mの粘土貼りが行われる。埋土には直径10cm程度の礫や粘土ブロックが見られる。五輪塔(24)が出土している。

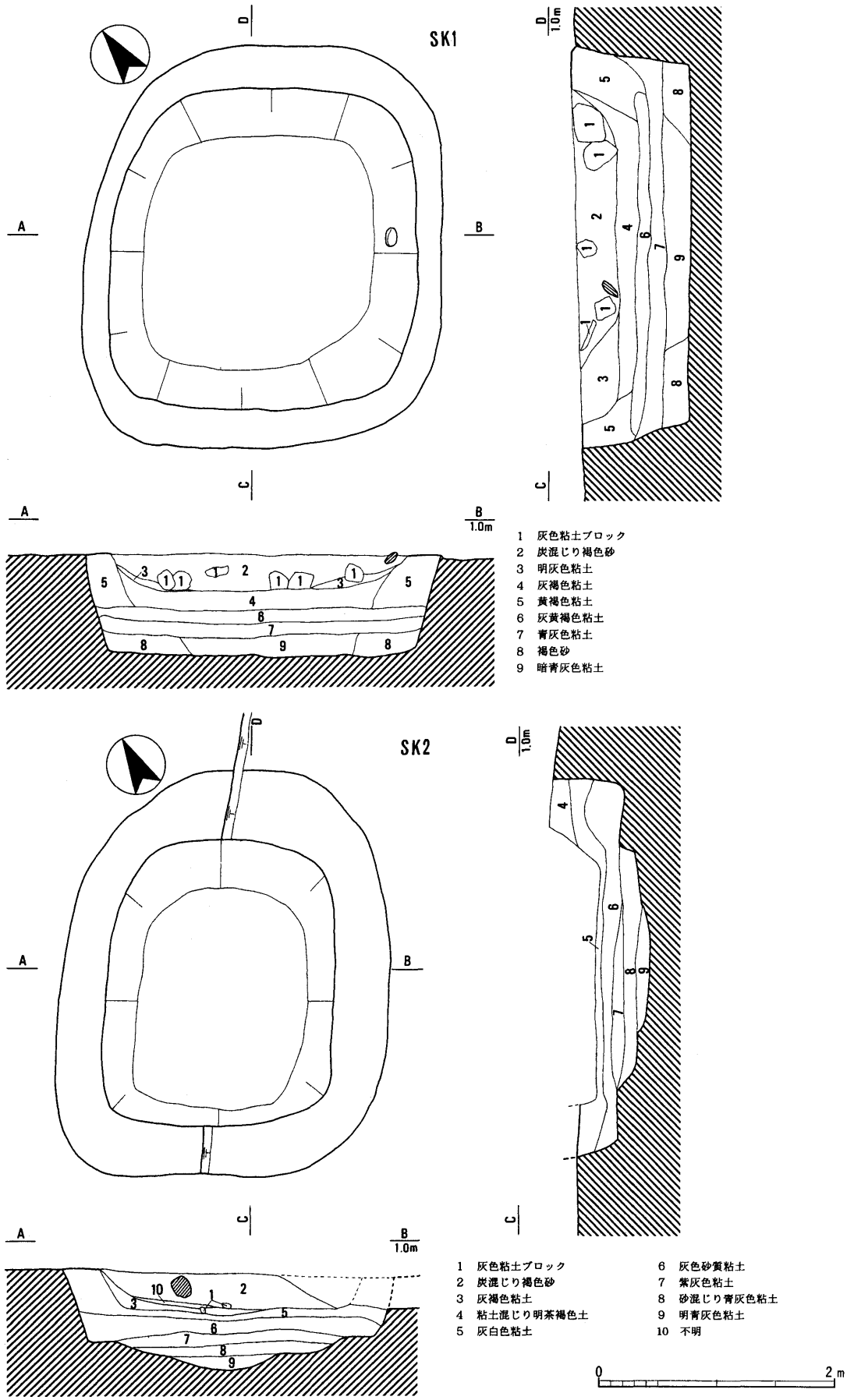
ＳＫ59　長径4.4m×短径3.7mの楕円形を呈する土坑で、深さ0.6mを計る。壁面0.3～0.5mの、底面には0.1mの粘度貼りが行われる。埋土には焼土や炭を含む。土師器鍋(5)や青磁椀(6)が出土。

ＳＫ77　長径4.3m×短径3.8mの楕円形を呈する土坑で、深さ0.5mを計る。粘土貼りは遺構の一部しか残っていなかった。

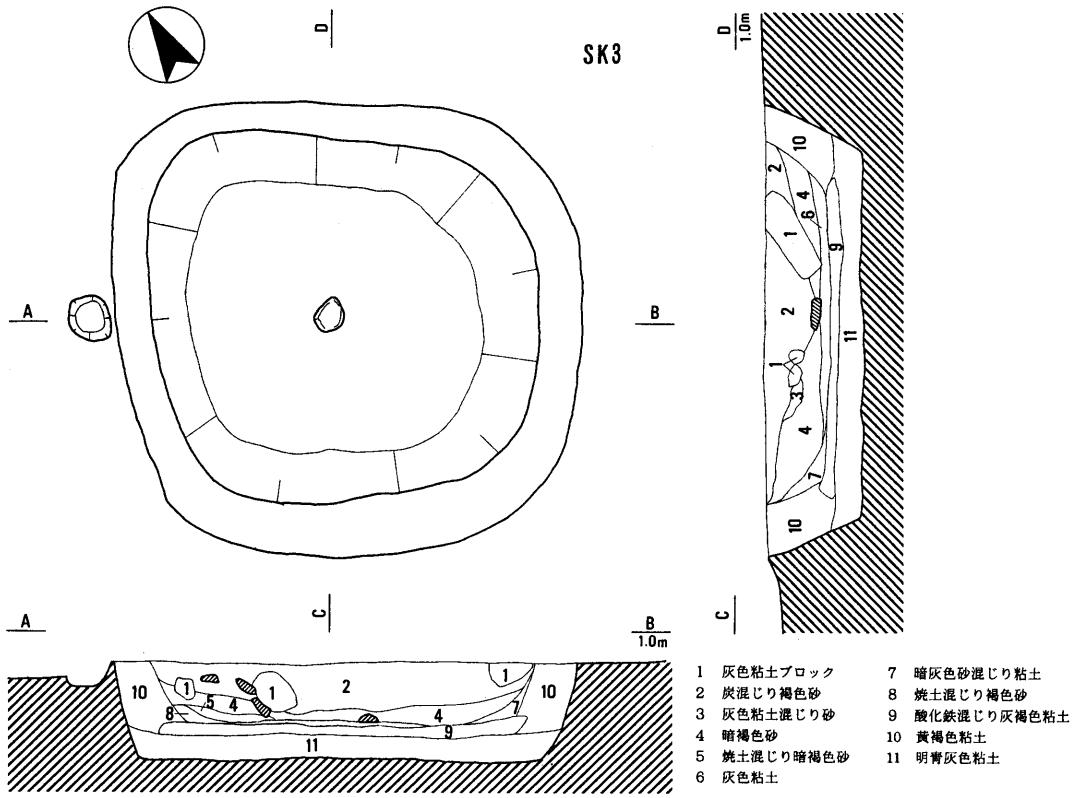
(2)小粘土坑

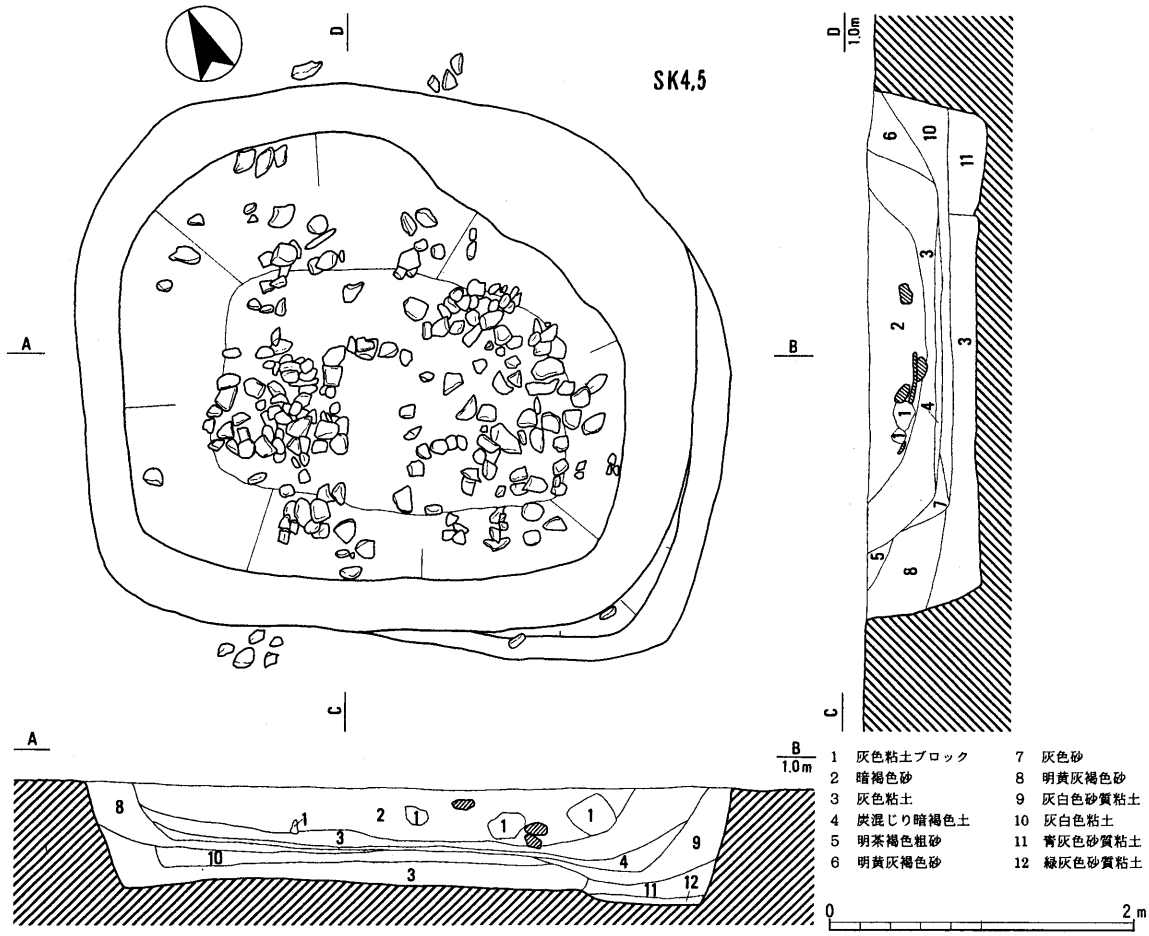
小粘土坑はおもに、直径0.8～1.0の楕円形を呈する土坑で、厚さ0.1～0.2mの粘土貼りを持つ。調査区中央南側で集中して見られるほか、１～２基で点在するものも見られる。

ＳＫ18・19　ともにＳＫ17に切られる小土坑で、楕円形もしくは隅丸長方形を呈する。深さは0.2～0.4

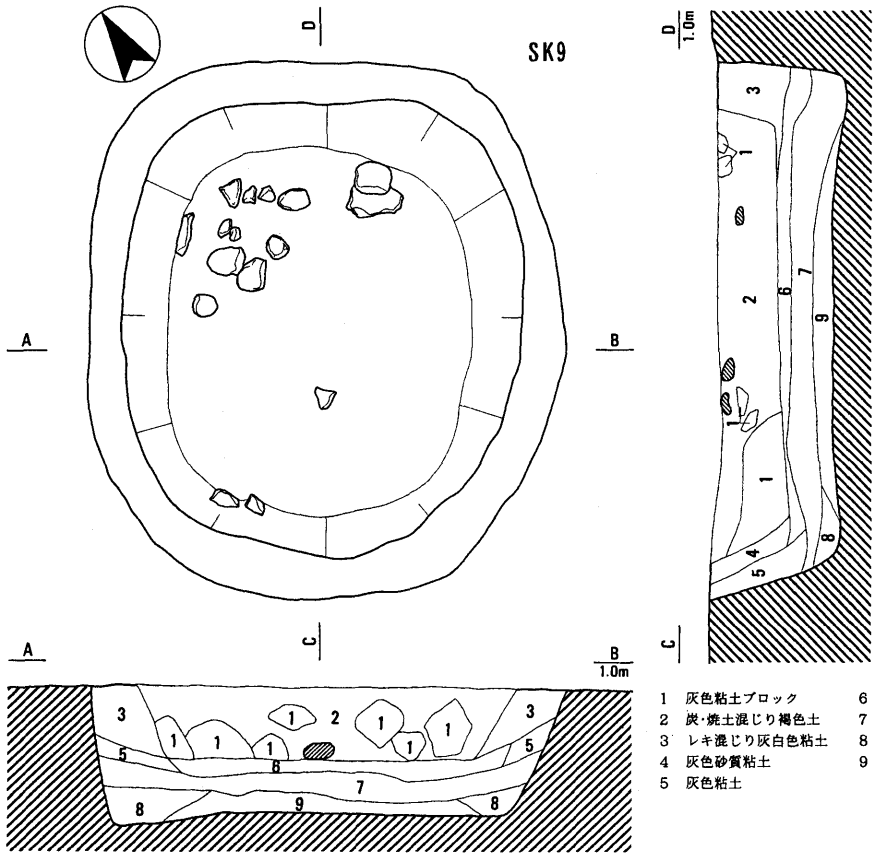


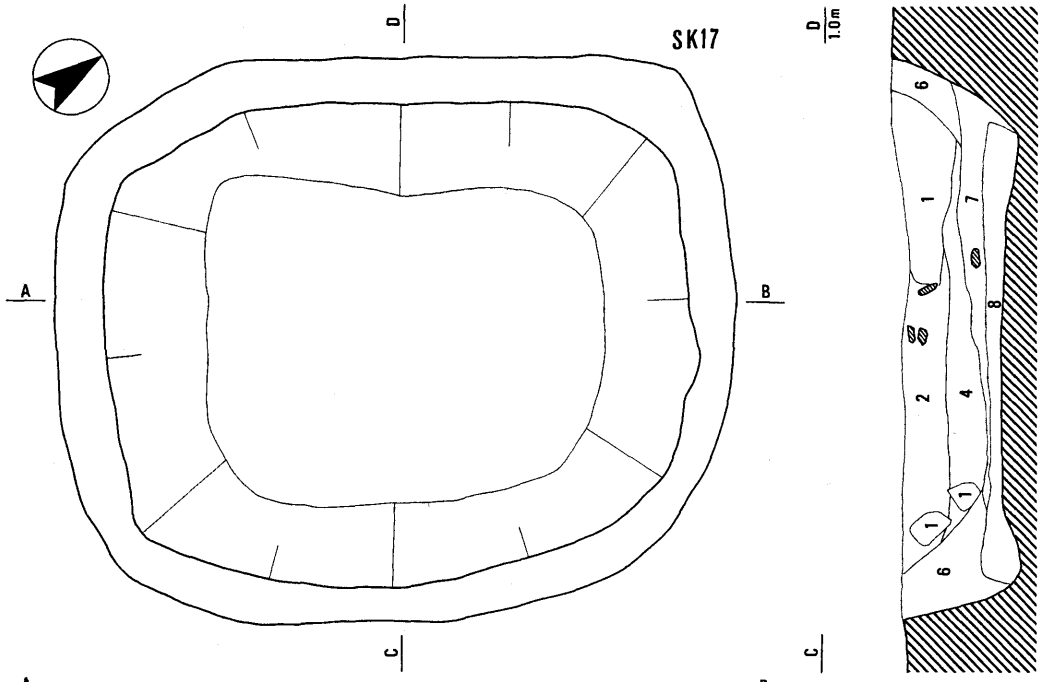
第 15 図　粘土坑実測図(1)(1:50)



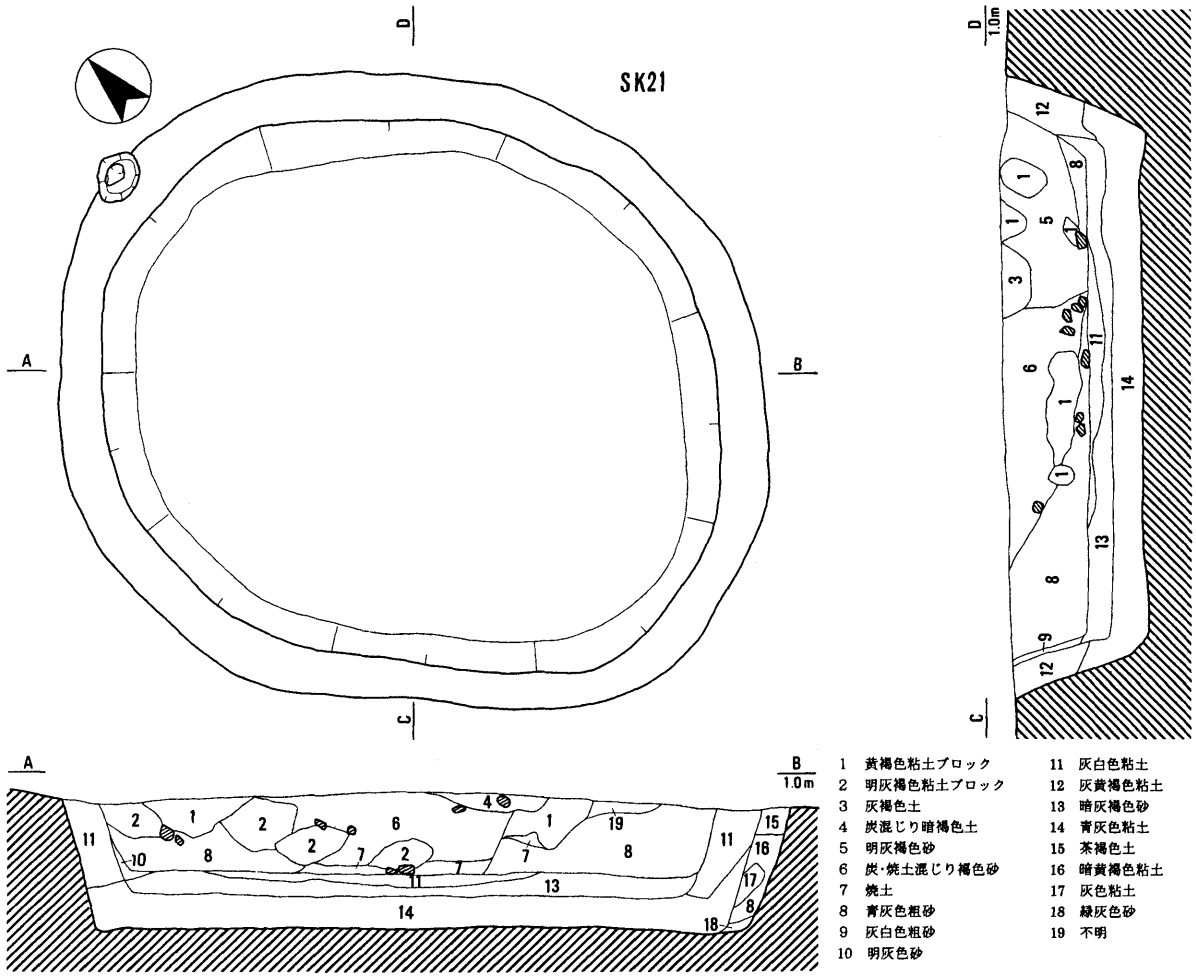


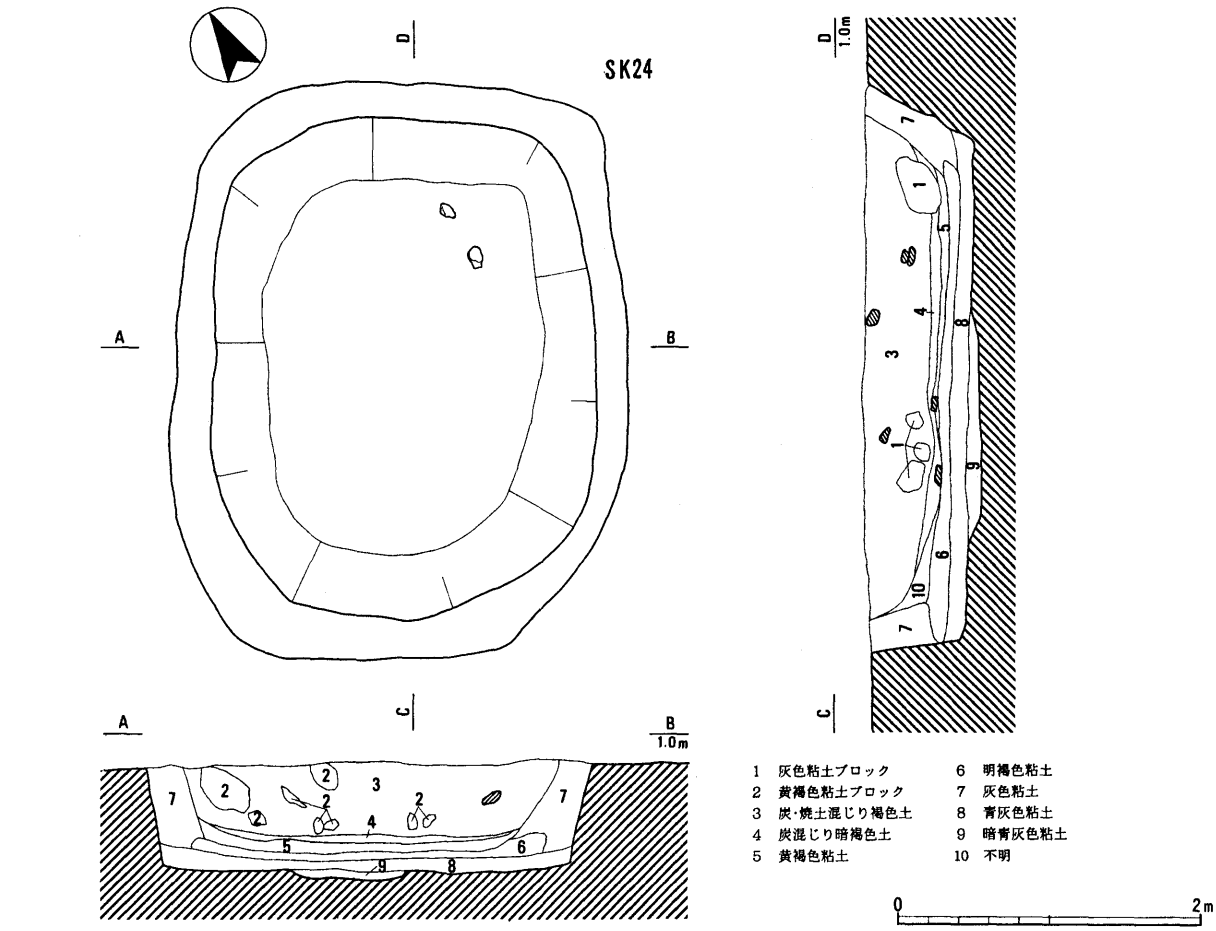
第 16 図　粘土坑実測図(2)(1:50)



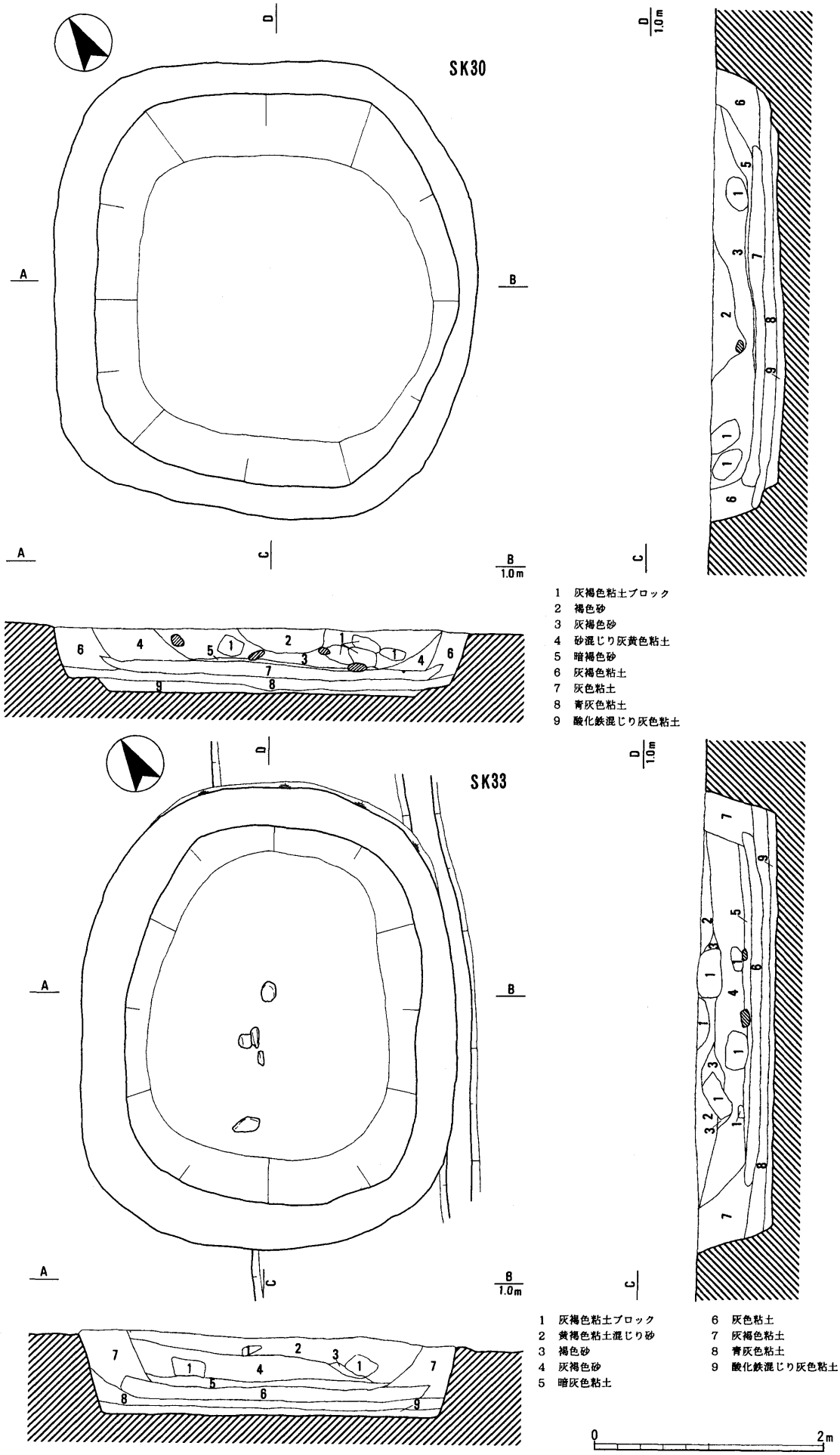


第 17 図　粘土坑実測図(3)(1:50)

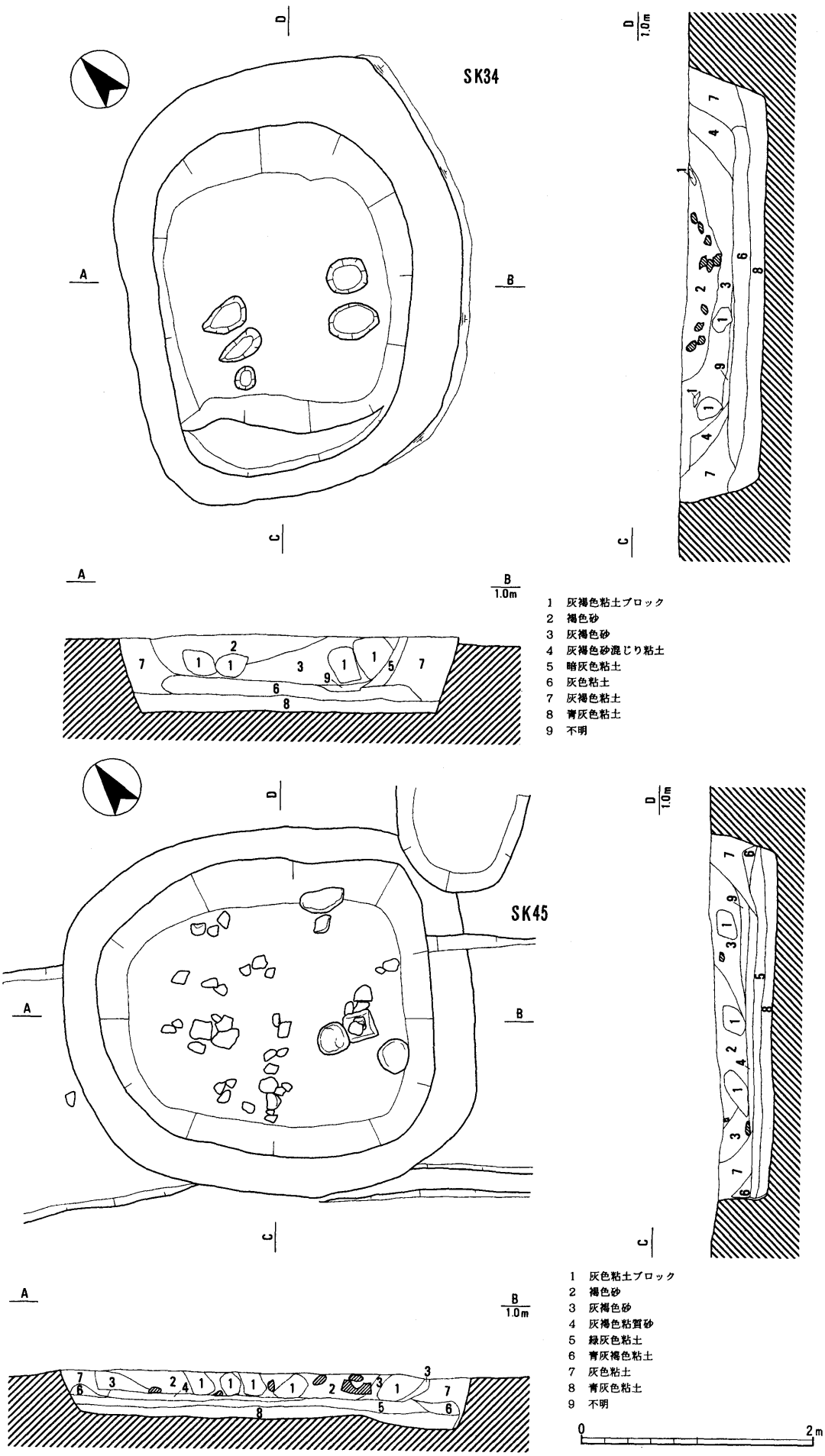




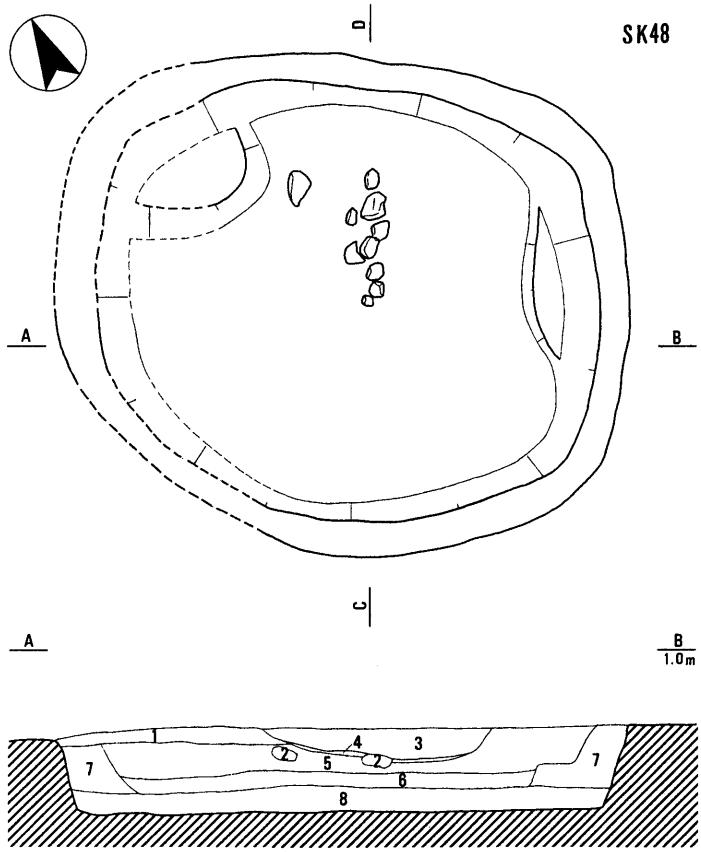
第 18 図　粘土坑実測図(4)(1:50)



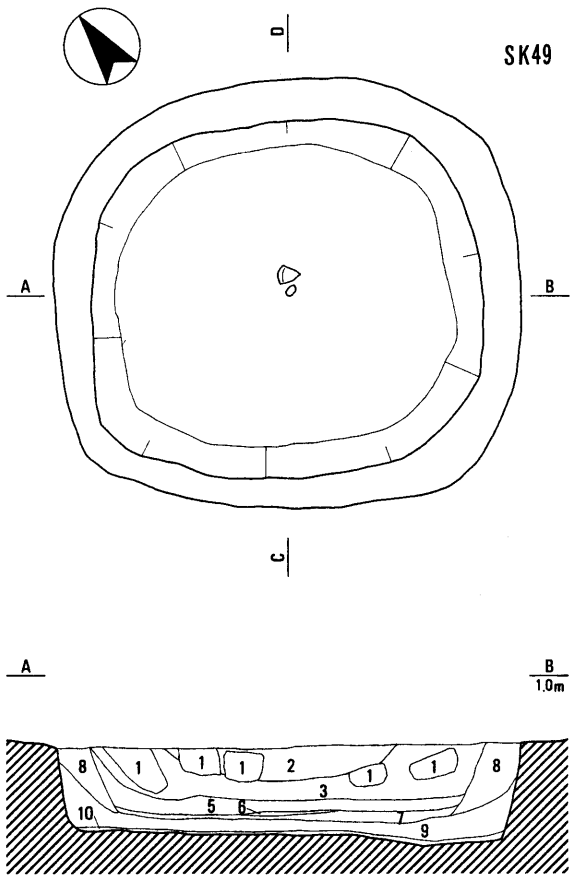
第 19 図　粘土坑実測図(5)(1:50)



第 20 図　粘土坑実測図(6)(1:50)



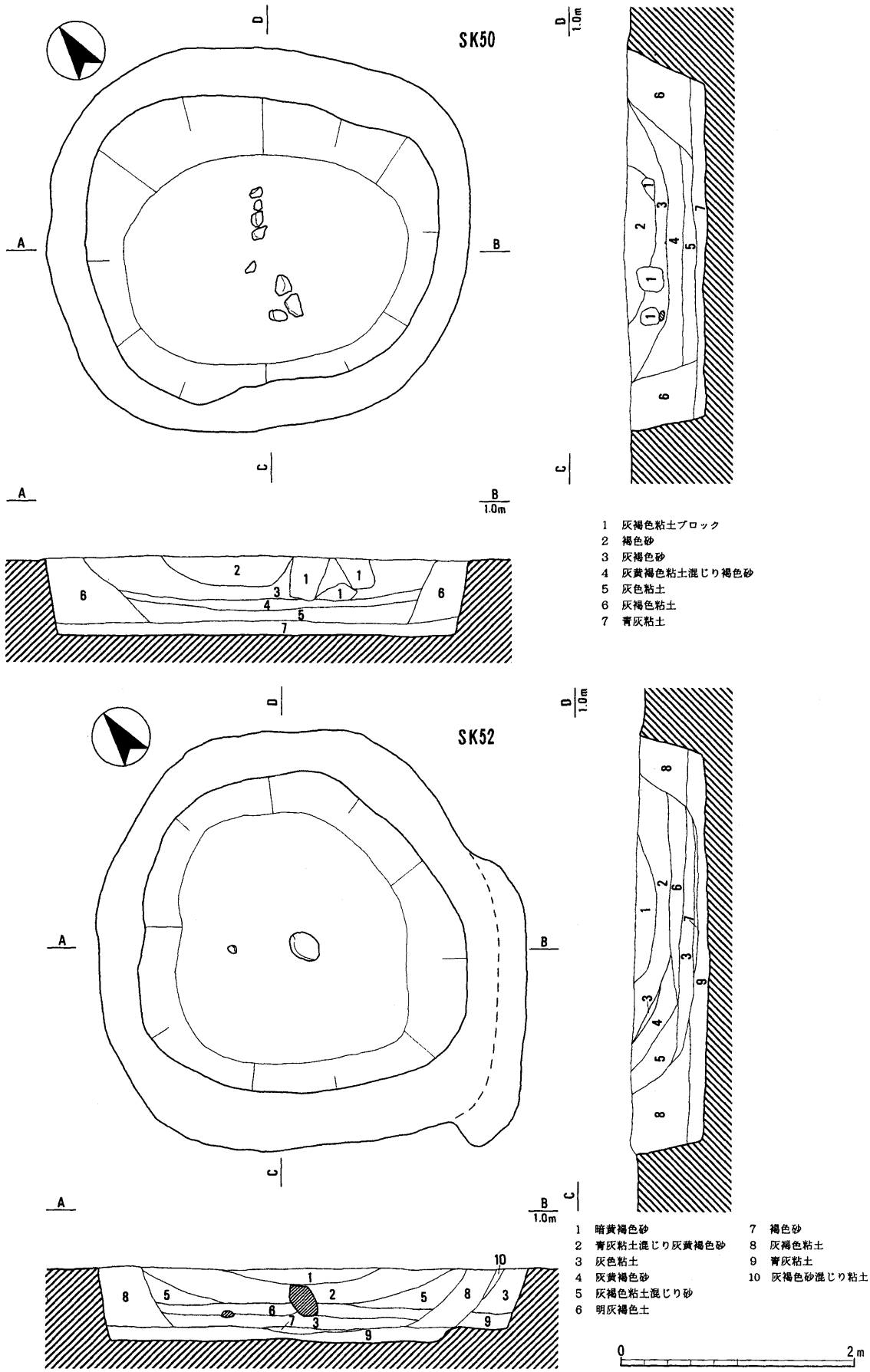
1　カクラン土
2　灰黄褐色粘土ブロック
3　黄褐色土
4　焼土混じり褐色土
5　暗灰褐色土
6　灰色粘土
7　灰黄褐色粘土
8　青灰粘土



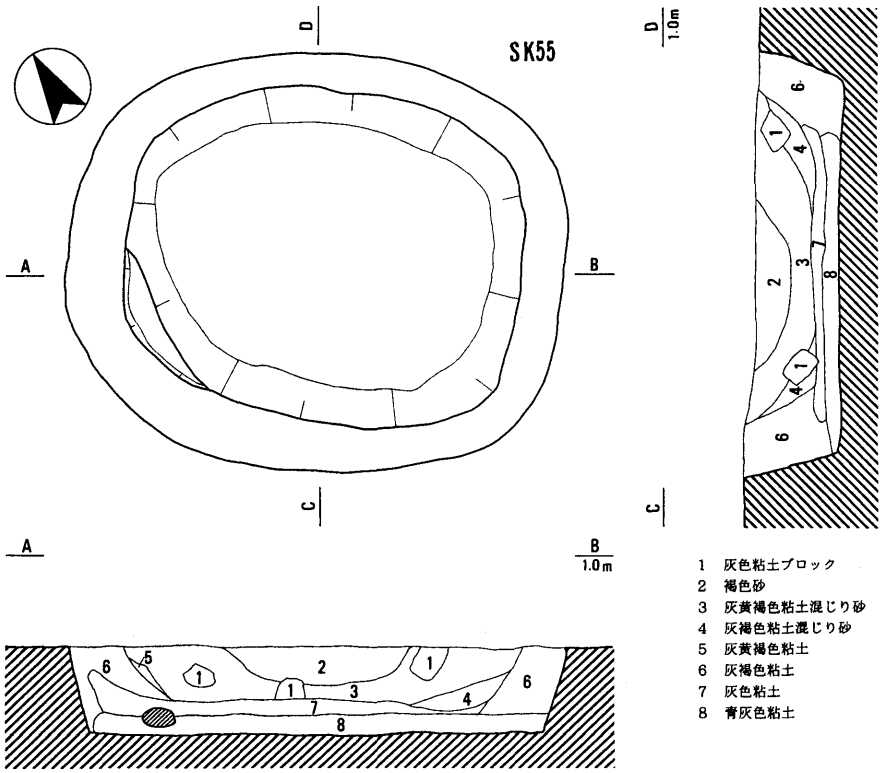
1　灰色粘土ブロック
2　褐色砂
3　灰褐色砂
4　灰色砂質粘土
5　灰色粘土
6　赤茶褐色粗砂
7　灰白色砂質粘土
8　レキ混じり灰白色粘土
9　青灰色粘土
10　灰褐色粘土

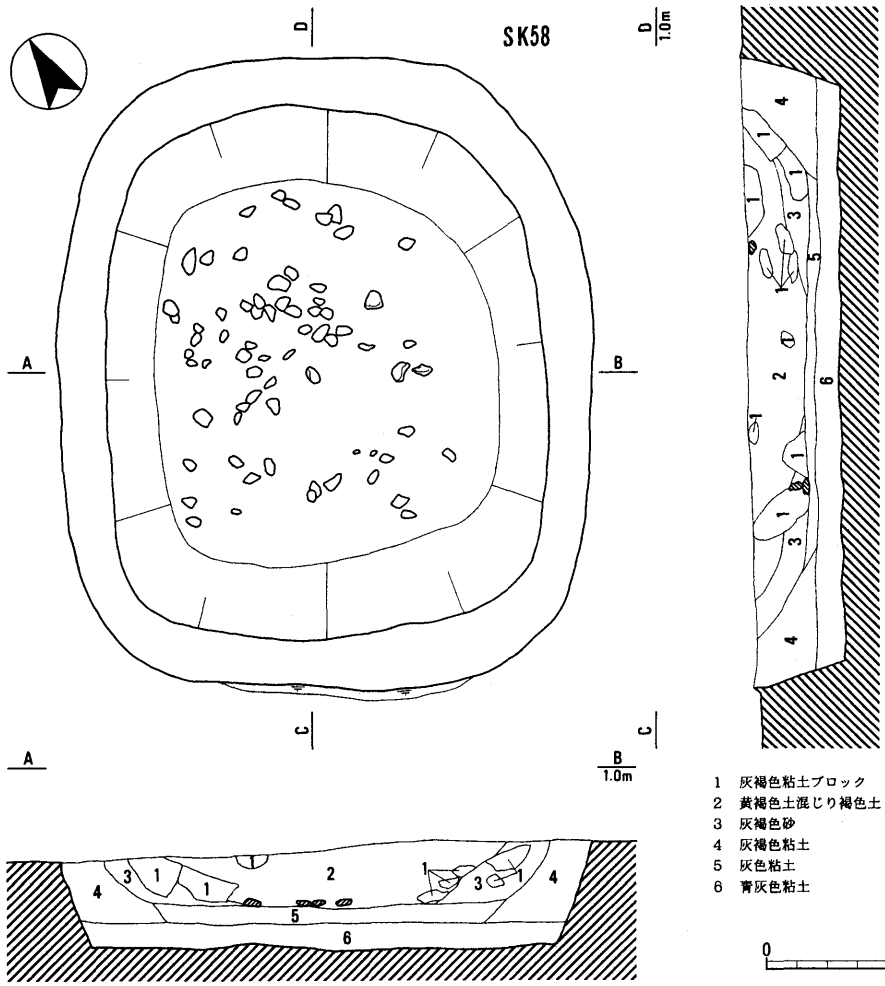
0　2m

第21図　粘土坑実測図(7)(1:50)

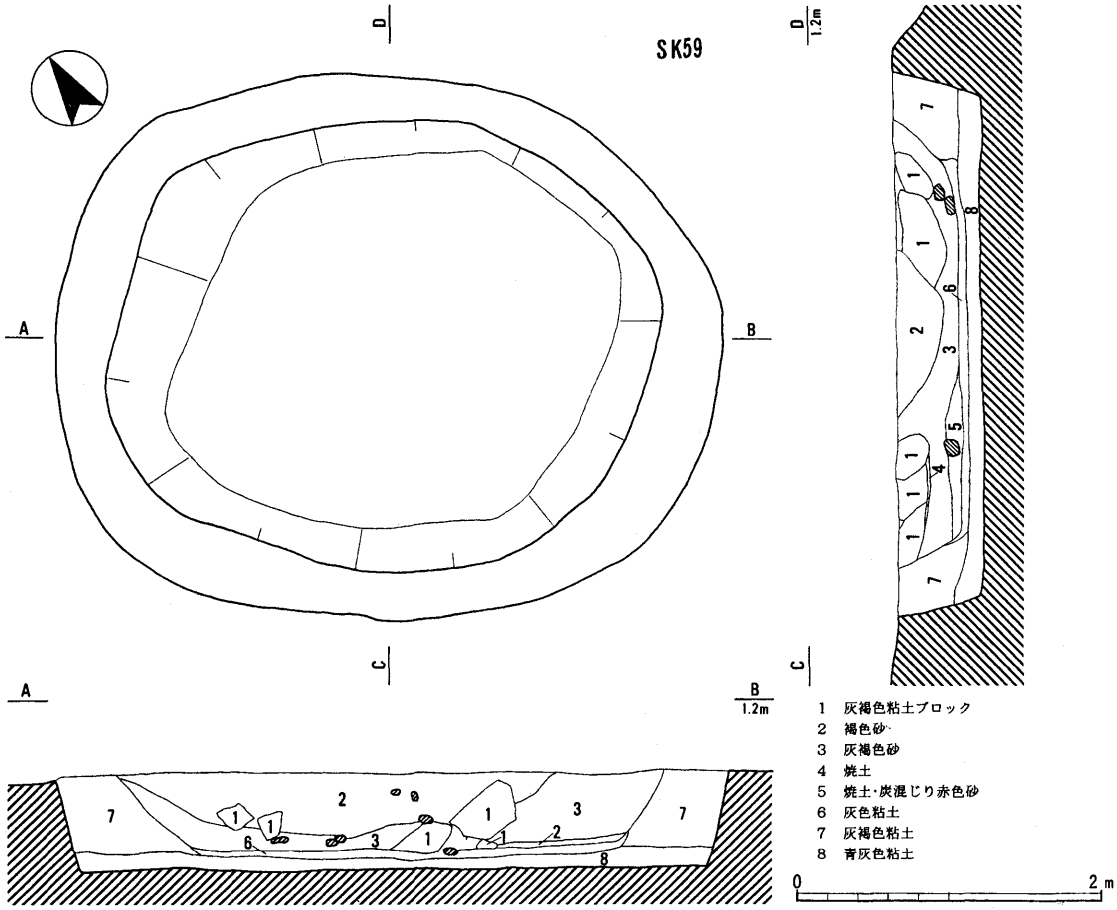


第 22 図　粘土坑実測図(8)(1:50)

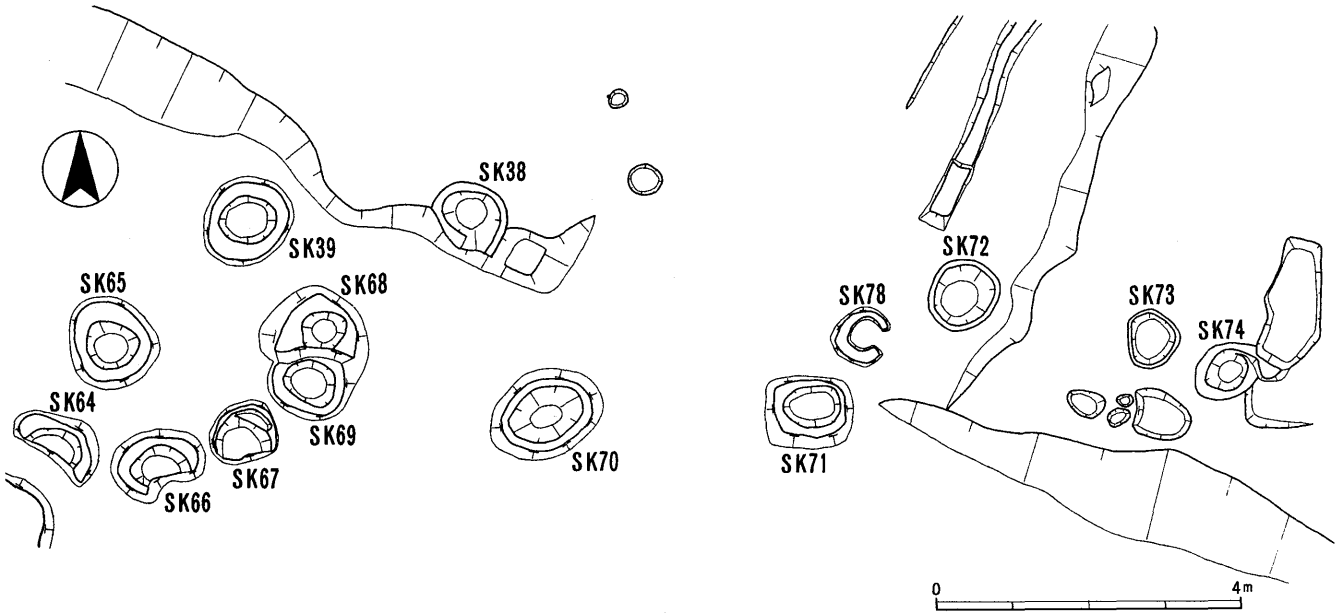




第 23 図　粘土坑実測図(9)(1:50)



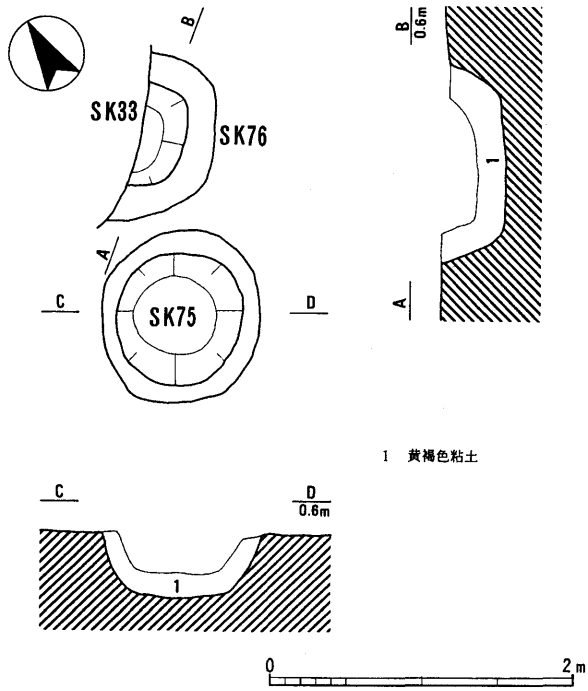
第 24 図　粘土坑実測図(10)(1:50)



第 25 図　小粘土坑群実測図 (1:100)

遺構番号	地区	形態	堀方			使用面				備考
			長径(直径)	短径	深さ	長径(直径)	短径	深さ	容量(L)	
SK18	e9	楕円形？	—	—	0.2	—	—		—	SK17に切られる
SK19	e9	隅丸長方形？	—	—		—	—		—	SK17に切られる
SK22	c8・c9	円形	0.9	0.8	0.1	0.5	0.5	0.1	19.6	
SK38	g6	楕円形	1.0	0.9	0.4	0.8	0.6	0.2	75.4	粘土壁一部欠損
SK39	g6	楕円形	1.1	1.0	0.6	0.7	0.6	0.4	131.9	
SK41	d12・d13	隅丸長方形	2.0	0.7	0.2	1.7	0.5	—	—	
SK51	d3	楕円形	1.9	1.3	0.2	1.4	0.7	0.2	153.9	
SK60	g3	楕円形	—	1.0	0.3	—	0.6	0.3	—	
SK63	c10	楕円形	1.7	1.3	—	0.8	0.5	—	—	
SK64	h6	円形？	1.1	—	0.4	0.8	—	0.2	—	攪乱受ける
SK65	h6	円形	1.1	1.0	0.4	0.7	0.6	0.2	65.9	
SK66	h6	楕円形？	1.1	—	0.4	0.8	—	0.2	—	攪乱受ける
SK67	h6	円形？	0.9	—	0.4	0.7	—	0.3	—	攪乱受ける
SK68	g6	円形	1.0	—	0.4	0.5	—	0.3	—	SK69に切られる
SK69	h6	楕円形	1.0	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	197.8	
SK70	g7	楕円形	1.2	0.9	0.5	1.0	0.7	0.4	219.8	
SK71	g8	隅丸長方形	1.0	0.8	0.5	0.8	0.5	0.3	94.2	
SK72	f8	円形	0.9	0.8	0.2	0.8	0.7	0.2	87.9	
SK73	f8	楕円形	0.8	0.7	0.3	0.6	0.4	0.3	56.5	
SK74	f9	楕円形	0.8	0.7	0.3	0.7	0.6	0.3	98.9	
SK75	e5	隅丸方形	0.9	0.8	0.1	0.7	0.6	0.1	33.0	
SK76	d5・e5	楕円形	0.8	—	0.2	0.6	—	0.2	—	SK33に切られる
SK78	f8・g8	隅丸方形	0.7	0.6	0.5	0.5	0.4	0.3	47.1	粘土壁一部欠損
合　計									1281.9	

第５表　小粘土坑一覧表



第26図　小粘土坑実測図（1:50）

m程度である。

ＳＫ22　調査区中央北側に位置している。直径0.9m程度の円形を呈し、深さは0.1mを計る。壁面には0.1m程度の粘土貼りが行われる。

ＳＫ38　長径1.0m×短径0.9mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.4mを計る。0.1m程度の粘土貼りが行われるが、一部欠損している。

ＳＫ39　直径1.1m×短径1.0mの楕円形を呈し、深さは0.6mを計る。0.2m程度の粘土貼りが行われる。

ＳＫ41　調査区東端に位置し、長径2.0m×短径0.7mの溝状の土坑で、深さは0.2mを計る。円形を呈し、深さは0.1mを計る。壁面には0.1m程度の粘土貼りが行われる。

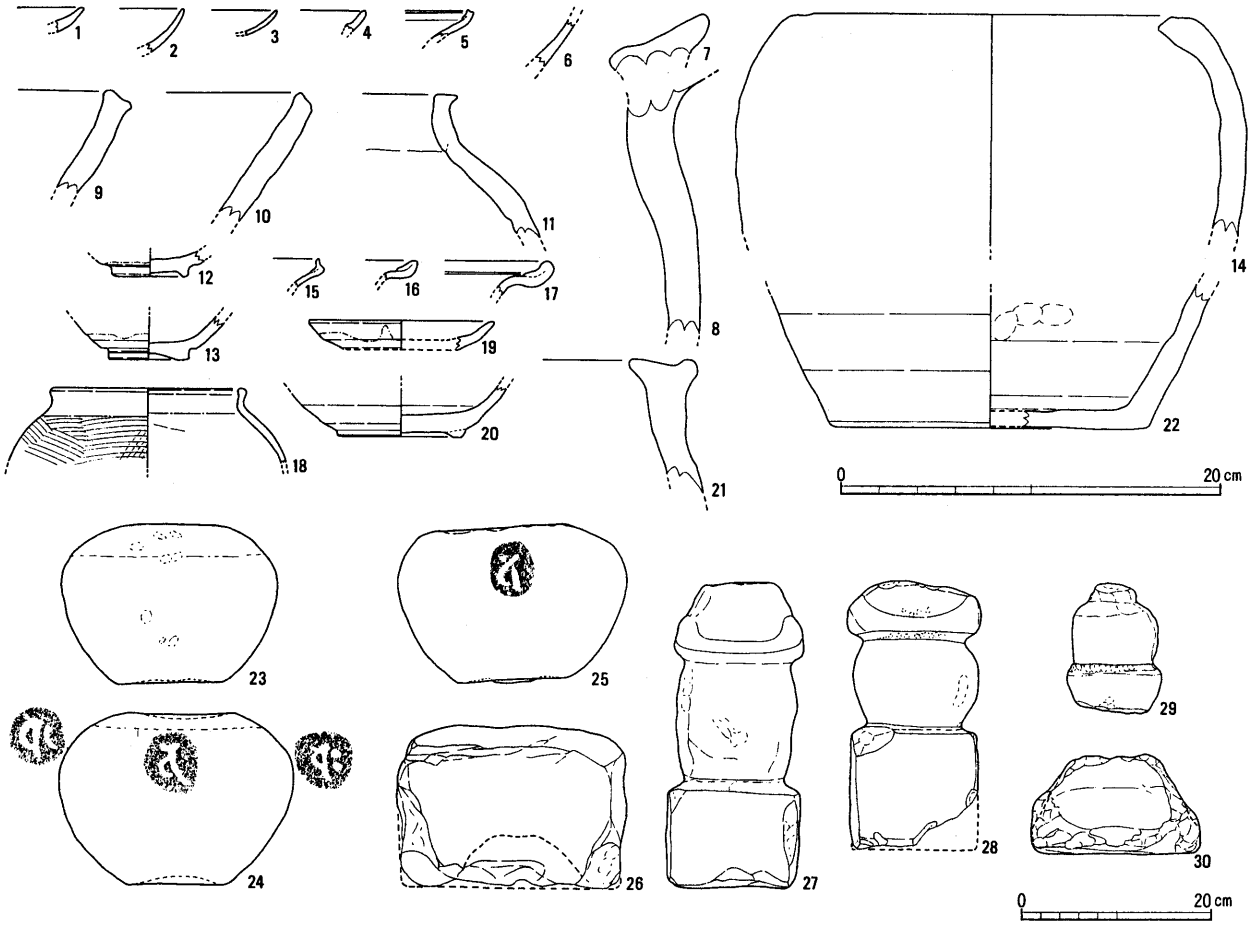
ＳＫ51　調査区北西部に位置しており、長径1.9m×短径1.3mの楕円形を呈し、深さは0.2mを計る。壁面には0.3mとやや厚い粘土貼りが行われる。

ＳＫ60　調査区南西部に位置しており、遺構の東側はＳＫ58によって切られる。長径1.0m以上×短径1.0mの楕円形の楕円形を呈し、深さは0.3mを計る。壁面には0.2mの粘土貼りが行われる。

ＳＫ51　調査区北東部に位置しており、長径1.7m×短径1.3mの楕円形を呈している。壁面には0.4mとやや厚い粘土貼りが行われる。

ＳＫ64～74　調査区中央南側に集中して見られる。直径1.1～0.7mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.3～0.7mを計る。ＳＫ64・66・67は一部削平を受ける。また、ＳＫ68はＳＫ69によって切られている。いずれも0.1～0.3mの粘土貼りが行われる。

ＳＫ75・76　調査区中央部に位置しており、直径0.



第27図　遺物実測図（1～22は1:4、23～30は1:8）

9m程度の楕円形を呈し、深さは0.1～0.2mを計る。壁面には0.1～0.2mの粘土貼りが行われる。ＳＫ76はＳＫ33に切られている。

ＳＫ78　調査区中央南側に位置しており、長径0.7m×短径0.6mの隅丸長方形を呈し、深さは0.5mを計る。壁面には0.1mの粘土貼りが行われるが、一部欠損している。

3　遺物

ＳＫ１出土遺物　土師器皿（１）の小片が出土。

ＳＫ４出土遺物　陶器甕（８）・捏鉢（９）が出土。９は常滑産と思われる。

ＳＫ33出土遺物　陶器皿（２）、土師器皿（３）・鍋（４）が出土。いずれも小片である。

ＳＫ45出土遺物　五輪塔（23・25～28）が出土している。25は水輪で花崗岩。25～28は砂岩。25は水輪で、梵字「バ」が刻まれる。26は地輪、27・28は一石五輪の火～地輪にあたる。

ＳＫ49出土遺物　陶器甕（７）が出土。常滑産の大甕口縁部と思われる。

ＳＫ58出土遺物　五輪塔（24）の水輪で花崗岩。３面に発心門・修行門・涅槃門の梵字「バ」・「バー」・「バク」が刻まれており、菩提門の「バン」は欠損している。

ＳＫ59出土遺物　土師器鍋（５）・青磁椀（６）が出土。５は南伊勢系のものである。６は外面に連弁文が施される。

その他の出土遺物　10～15は整地層から、16～22は包含層より出土している。10は陶器捏鉢、11は陶器壺。共に常滑産と考えられる。12は陶器椀で内面は施釉される。13は陶器天目茶椀。15～17は南伊勢系の土師器鍋。15は伊藤編年[1]の第４段階、16・17は第１段階にあたるものと考えられる。20は陶器山茶椀で、藤澤編年[2]の６～７型式にあたる。29も一石五輪塔で、空輪から火輪の一部が残る。

4　結語

（1）小狐遺跡について

小狐遺跡では塩竈になるような焼土土坑は確認されなかったが、池ノ上遺跡同様、鹹水槽と考えられ

る粘土貼りの土坑が多数確認されたことから、製塩遺跡であると考えられる。塩竈については、後世の削平によって消滅した可能性が考えられるが、調査区西部のｄ４～ｆ７地区にかけて、調査区中央北側のｃ６～ｃ９地区にかけて、調査区東端のｃ12～ｄ13にかけての３ヶ所に鹹水槽の空閑地があり、この辺りに釜屋が存在していたものと考えられる。

小狐遺跡の粘土坑も、池ノ上遺跡と同じく、粘土の貼り方によって分類できるが(分類Ⅰ～Ⅳ)、底面に３層以上の粘土貼りが行われているもの［Ⅴ］が多く見られる。これは、分類Ⅲ・Ⅳと同じく保水効果を高めるためや、補修・改築が行われた結果と考えられる。小狐遺跡の鹹水槽は、池ノ上遺跡のものと比較して大型のものが多く、容量も１基あたり平均2777.8Ｌと、池ノ上遺跡の平均1476.3Ｌのほぼ倍となっている。底面の粘土貼りが小狐遺跡で厚い傾

番号	登録番号	種別器形	グリッド遺構・層	計測値(cm)	調整	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-07	土師器 皿	d10 SK21	－	外面：ロクロケズリ・ナデ 内面：ロクロナデ	粗	良	浅黄橙	口縁部 1/5	
2	001-10	陶器 皿	d５ SK33	－	口縁部：ヨコナデ、施釉	やや密	良	淡黄	口縁部 1/10	
3	001-08	土師器 皿	d５ SK33	－	口縁部：ヨコナデ	やや密	良	灰白	口縁部 1/10	
4	001-05	土師器 鍋	d５ SK33	－	口縁部：ヨコナデ	やや密	良	暗灰黄	口縁部 1/10	
5	001-09	土師器 鍋	d３ SK59	－	ナデ	やや密	良	にぶい黄橙	口縁部 1/10	
6	001-03	陶器 青磁椀	h４ SK59	－	外面：連弁文	やや密	良	灰白	体部 1/7	
7	001-12	陶器 甕	d３ SK49	－	ナデ	粗	良	にぶい橙	口縁部 1/10	常滑産
8	001-13	陶器 甕	c11 SK４	－	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	粗	良	にぶい橙	体部 1/10	
9	004-05	陶器 捏鉢	c11 SK４	－	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	やや密	良	にぶい橙	1/10	常滑産
10	004-03	陶器 捏鉢	g８ 整地層	－	外面：調整不明 内面：ナデ	粗	良	にぶい黄橙	1/10	常滑産
11	004-06	陶器 壺	g12 整地層	－	内外面：工具ナデ	やや密	良	赤褐	1/10	常滑産
12	004-02	陶器 皿	g８ 整地層	－	ロクロナデ、施釉	やや密	良	淡黄	底部 1/3	瀬戸産
13	004-04	陶器 椀	c５ 整地層	高台 4.0	ロクロナデ、鉄釉	やや密	良	灰白	底部 2/3	天目
14	005-06	陶器 鉢	h５ 整地層	－	外面：ロクロナデ 内面：工具ナデ	やや密	良	にぶい橙	口縁部 1/10	
15	004-10	土師器 鍋	h７ 整地層	－	口縁部：ヨコナデ	密	良	浅黄橙	1/5	
16	004-09	土師器 鍋	f２ 包含層	－	口縁部：ヨコナデ	やや密	良	灰白	口縁部 1/10	
17	002-05	土師器 鍋	g５ 包含層	－	口縁部：ヨコナデ	やや密	良	灰白	口縁部 1/10	
18	002-03	土師器 鍋	g２ 包含層	－	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	浅黄橙	口縁部 1/7	
19	004-01	陶器 皿	f２ 包含層	－	外面：ハケ・ナデ、底部：ケズリ 内面：ナデ	やや密	良	灰白	1/5	ハケメ５本／１cm
20	002-02	陶器 山茶椀	f４ 包含層	高台 6.6	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ナデ	密	良	灰白	1/2	
21	005-03	陶器 甕	c９ 包含層	－	口縁部：ロクロナデ	やや密	良	にぶい黄橙	口縁部 1/5	常滑産
22	002-01	陶器 壺	c７ 包含層	－	内面：ナデ、オサエ→ナデ	やや密	良	にぶい橙	1/3	常滑産 内面使用痕
23	012-01	五輪塔 水輪	f２ SK45	長さ：16.7cm 幅　：22.5cm	－	－	－	青灰	－	花崗岩
24	008-01	五輪塔 水輪	g３ SK58	長さ：18.1cm 幅　：24.6cm	－	－	－	青灰	－	花崗岩 ３面に梵字、一方欠損
25	009-01	五輪塔 水輪	f２ SK45	長さ：27.0cm 幅　：17.0cm	－	－	－	灰白	－	砂岩 梵字あり
26	007-01	五輪塔 地輪	f２ SK45	長さ：17.2cm 幅　：23.6cm	－	－	－	灰白	－	砂岩
27	006-01	五輪塔 火～地輪	f２ SK45	長さ：32.2cm 幅　：13.8cm	－	－	－	灰白	－	砂岩
28	010-01	五輪塔 火～地輪	f２ SK45	長さ：28.5cm 幅　：13.5cm	－	－	－	灰白	－	砂岩
29	013-01	五輪塔 空～火輪	落ち込み	長さ：13.8cm 幅　：9.9cm	－	－	－	灰白	－	砂岩
30	011-01	五輪塔 火輪	e７ Pit１	長さ：10.3cm 幅　：17.8cm	－	－	－	灰白	－	砂岩

第６表遺物観察表

向を示すのは、鹹水槽の大型化に伴い、より保水効果を高めるために改良されたことも考えられる。

(2)黒部の製塩遺跡について

池ノ上・小狐遺跡はともに製塩遺跡と考えられる。黒部地区を中心とした櫛田川河口部は、古くから製塩が盛んであったことが知られている。伊勢大湊の太田家に伝わる『太田文書』[3]には、13世紀末から15世紀末にかけての塩浜や塩竈に関する売券が残されており、中世後期には南伊勢地域で製塩が盛んに行われていたことが窺える。『澤氏古文書』の中には、延徳2(1490)年の「飯高郡飯野郡条里図」が残されている。ここには「本塩浜」という記載が見られ、すでに櫛田川から坂内川の河口部には塩浜が展開していたことがわかる[4]。また、『澤氏古文書』には弘治2(1556)年に「西黒部塩竈公事」とあり、当地域が16世紀段階で澤氏の支配下にあったことがわかる。池ノ上遺跡の鹹水槽は整然と並んでおり、計画的に建築されたことが窺える。当遺跡の成立に、澤氏が関わっていた可能性も考えられよう。

また『澤氏古文書』には「西黒部海上警固」ともあり、『船々聚銭帳』には「くろへ舟」の記載がある。これは黒部が北畠家氏のもと、伊勢大湊の流通圏に含まれていた事を示している。櫛田川の上流には、水銀の精錬や白粉の生産を行った射和津が存在する。北畠氏は早くから射和の重要性に着目しており、文明18(1485)年には伊勢神宮から津料の収集権を奪取している。河口に位置する黒部は、塩の生産地であったほか、射和と大湊を結ぶ中継地としても重視されていたのであろう。また、射和では、近代まで操業が続けられた東黒部に製塩用の松割木を舟で運び、帰りに塩を積んで帰っている[5]。

製塩に用いられた釜については、土釜や石釜、鉄釜などがあるが、池ノ上・小狐遺跡ではこれらの遺物が出土していないため、どういった釜が使用されていたかは不明である。鹹水槽に多量の礫や粘土ブロックが投棄されていたことから、竈は礫を粘土で固めていたものと考えられる。また、射和の北に所在する阿波曽・蛸路には鋳物師集団が存在し、時期はやや下るものの、黒部に塩釜を供給していた可能性が指摘されている[6]。能登地方などでは、平安時代から鉄釜が使用されており、池ノ上・小狐遺跡でも早くから鉄釜が使用されていた可能性が考えられよう。

黒部周辺の製塩については、15世紀末にはすでに成立していたものと考えられ、16世紀になって整然と配置された鹹水槽を持つ釜屋が形成されたものと考えられる。廃絶時期については、出土遺物からは明確にわからないが、。和歌山藩に属する西黒部では、近代まで操業が続けられた津藩領東黒部に対し、早くから水田開発が進められている。検地帳[7]によると、承応2(1653)年には字小狐のおよそ70%が、宝暦2(1752)年にはほぼ全域が水田や畑地となっており、塩浜は17世紀中頃から18世紀中頃には廃絶したものと考えられる。

【註】

(1)伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol.1、三重歴史文化研究会、1990

(2)藤澤良祐『瀬戸市民俗資料館　研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館、1983

(3)『太田文書』伊勢市大湊支所蔵

(4)『澤氏古文書』内閣文庫所蔵

(5)『松阪市史』第三巻　史料編　古代・中世、松阪市、1980

沿岸部の新田の横に「本塩濱」と記されており、これは塩浜が水田に転換されたものと考えられるが、15世紀末にはすでに当地周辺で塩浜が展開していたことを示すものであろう。

(6)小林秀「中世後期南伊勢の鋳物師について」『Miehistory』vol.2、三重歴史文化研究会、1990

(7)「古新田検地帳　西黒部村」・「御検地帳　宝暦二年申十二月西黒部村」松阪市立図書館蔵

(『松阪市史』第五巻資料編、松阪市史編さん委員会、1978)

【参考文献】

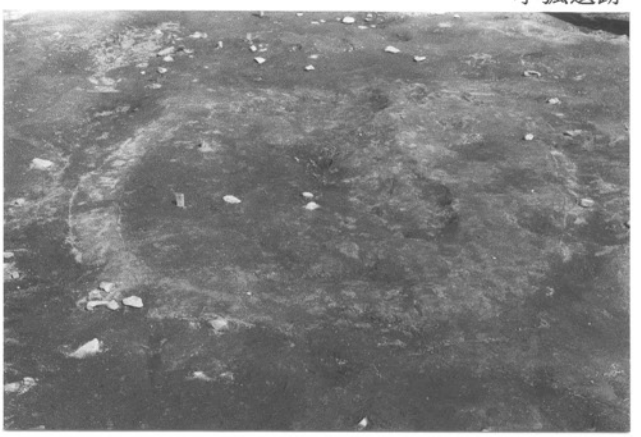
・西山傳左衛門『黒部史』松阪市立図書館、1955

・『三重県の地名』平凡社、1983

全景（北東から）

全景（東から）

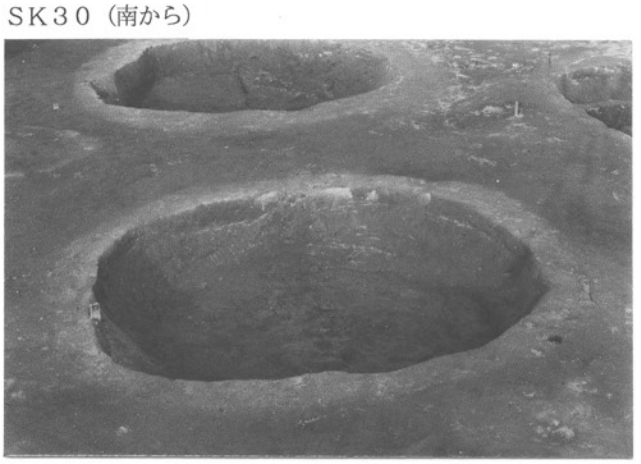
SK３検出状況（南から）



SK９検出状況（南から）

SK３０（南から）

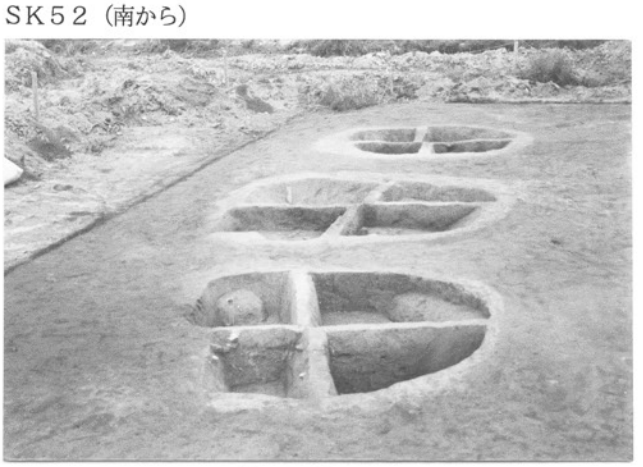
SK４５（南から）



SK４９（南から）

SK５２（南から）

SK５５（南から）



SK４８・５０・５５（南から）

V　西黒部西山遺跡

1　はじめに

西黒部西山遺跡は、櫛田川左岸、標高約 1.0m の沖積低地の、周囲より 30 ㎝程高い自然堤防上に立地する。行政上は松阪市西黒部町西山であり、集落内の西蓮寺の北約 140mに位置する。現況は畑地である。当遺跡は、『松阪市史』において西黒部遺跡として紹介されており、遺跡範囲は 5,000 ㎡で古墳時代末期から奈良時代の所産である土師器甕が表採されている。範囲確認調査は「寺裏遺跡」として行なったが、本発掘調査は『松阪市史』①を受けて「西黒部遺跡」として調査を行った。その後遺跡名については小字名をつけることに統一したため、今回調査区の小字名を加えて「西黒部西山遺跡」として整理作業を進めた。発掘調査では、古墳時代後期から明治時代の遺構・遺物が検出された。

2　遺構

遺構名称については、調査時のグリッド名と遺構掘削後に行なった遺構平面図作成時のグリッド名に誤差が生じたことから、整理作業時の混乱を回避するため改めて遺構対照表を作成した。また、発掘調査終了時に作成した『西黒部遺跡発掘調査ニュース』で新たに付け直した番号も対照表に加えた(第 1 表)。

以下、主な遺構について見ていく。

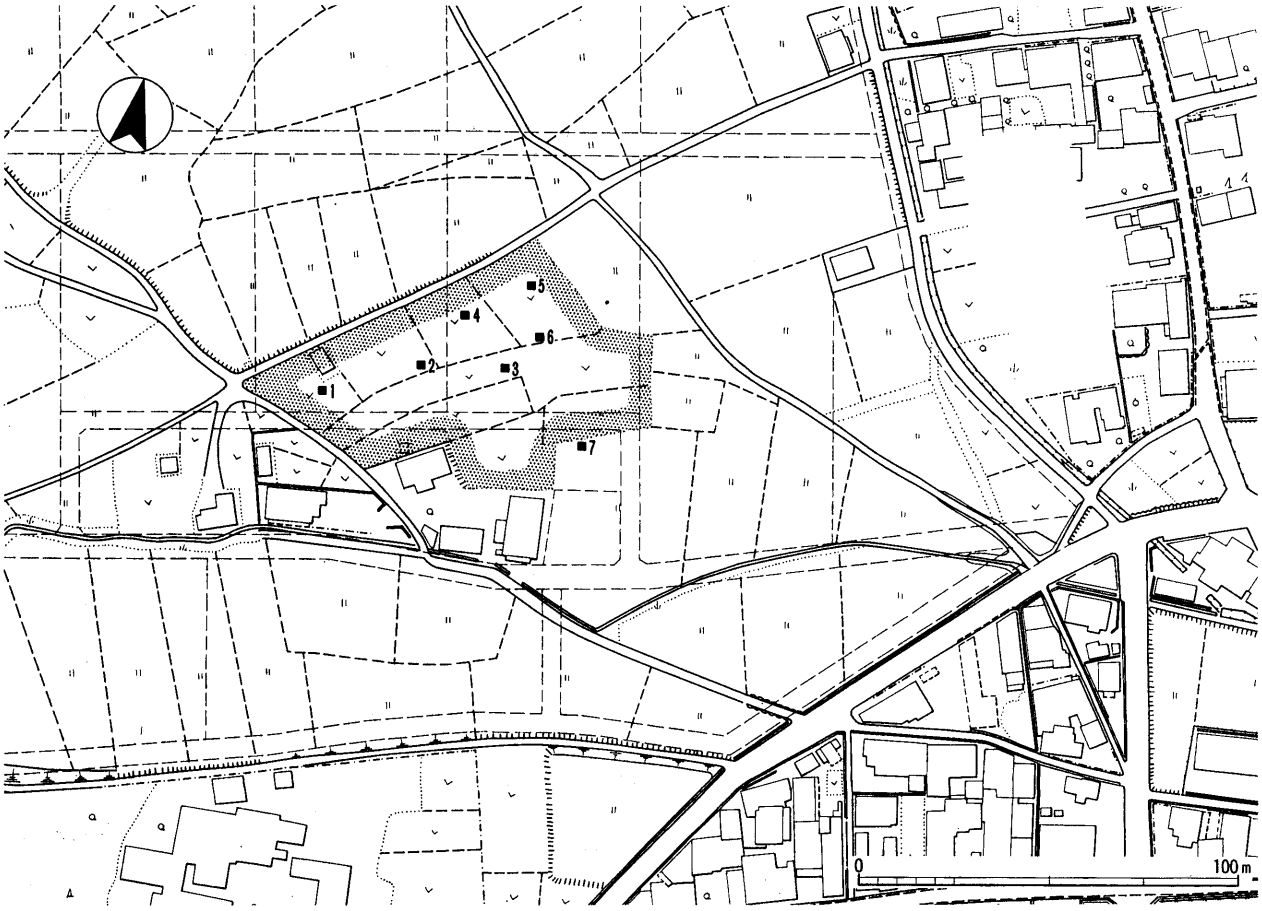
(1)　古墳時代後期

SH20（第 30 図）　調査区東南部で検出した。東西 4.4m×南北 4.3m・深さ 23.0 ㎝、平面形は北西角がやや形の崩れた隅丸方形を呈する竪穴住居である。主柱穴は 4 ヶ所検出した。遺構中央部には後世の土坑 SK36 が掘られる。

SH25　調査区ほぼ中央で検出した。東西 3.6m×南北 3.7m・深さ 13.0 ㎝、方形の平面形を呈する竪穴住居である。南角を溝に切られている。主柱穴等は確認できなかった。

SK11　東西 1.3m×南北 0.7m、深さ 21.0 ㎝の長方形土坑である。

SK13　直径 1.2m、深さ 15.0 ㎝の円形土坑である。



第 28 図　遺跡周辺地形図（1:2000）■は試掘坑

(2) 平安時代末

SK36（第30図） 古墳時代末の遺構SH20を切る土坑で、直径60.0㎝・深さ50.0㎝の規模を測る。

(3) 江戸時代末～明治時代

SE17（第30図） 東西1.4m×南北1.4m・深さ0.8m以上の平面形が隅丸方形の掘形に、東西1.2m×南北0.6mの木組みを井筒に持つ。井筒は横板組1段で、中央に直径50.0㎝、深さ50.0㎝の結桶を据える。掘形から陶器合子（46）が出土した。

SK9（第30図） 東西辺4.0m×南北辺2.7m・深さ70.0㎝の土坑である。横板と止め棒で周囲の砂が流れ込むのを留めている。水溜め状遺構と思われる。

SK10 東西辺3.9m×南北辺2.5㎝・深さ20.0㎝の土坑である。南北3.4m×東西2.1m、深さ18.0㎝の平面隅丸長方形の土坑である。

SD14 長さ4.5m×幅70.0m、深さ12.0㎝の溝である。

3 出土遺物

(1) 古墳時代末～奈良時代の遺物

SK1 出土遺物（1） 土師器長胴甕である。体部はやや膨らむ形状になると思われる。

SK2 出土遺物（2） 土師器長胴甕である。体部最大部径が口縁部径より小さくなるだろう。

SF4 出土遺物（3） 土師器長胴甕細片である。

SK6 出土遺物（4） 土師器甕細片である。

SK11 出土遺物（5） 土師器甕である。長胴か。

SK12 出土遺物（6） 土師器甕である。長胴甕か。

SK13 出土遺物（7） 土師器長胴甕である。

SK24 出土遺物（8・9） 土師器台付杯（8）は全体に摩滅激しい。9は土師器長胴甕である。

SK26 出土遺物（10～15） 須恵器杯身（10）はTK209型式併行期の所産である②。土師器杯（11）の内面にはミガキが施される。12は内外面とも器壁が剥離し、調整等は確認できない。土師器長胴甕（13）は体部最大部径が口縁部径と同じかもしくは小さくなる形態を呈すると思われる。14・15は体部が球状を呈する長胴甕である。

SK28 出土遺物（16） 土師器長胴甕である。

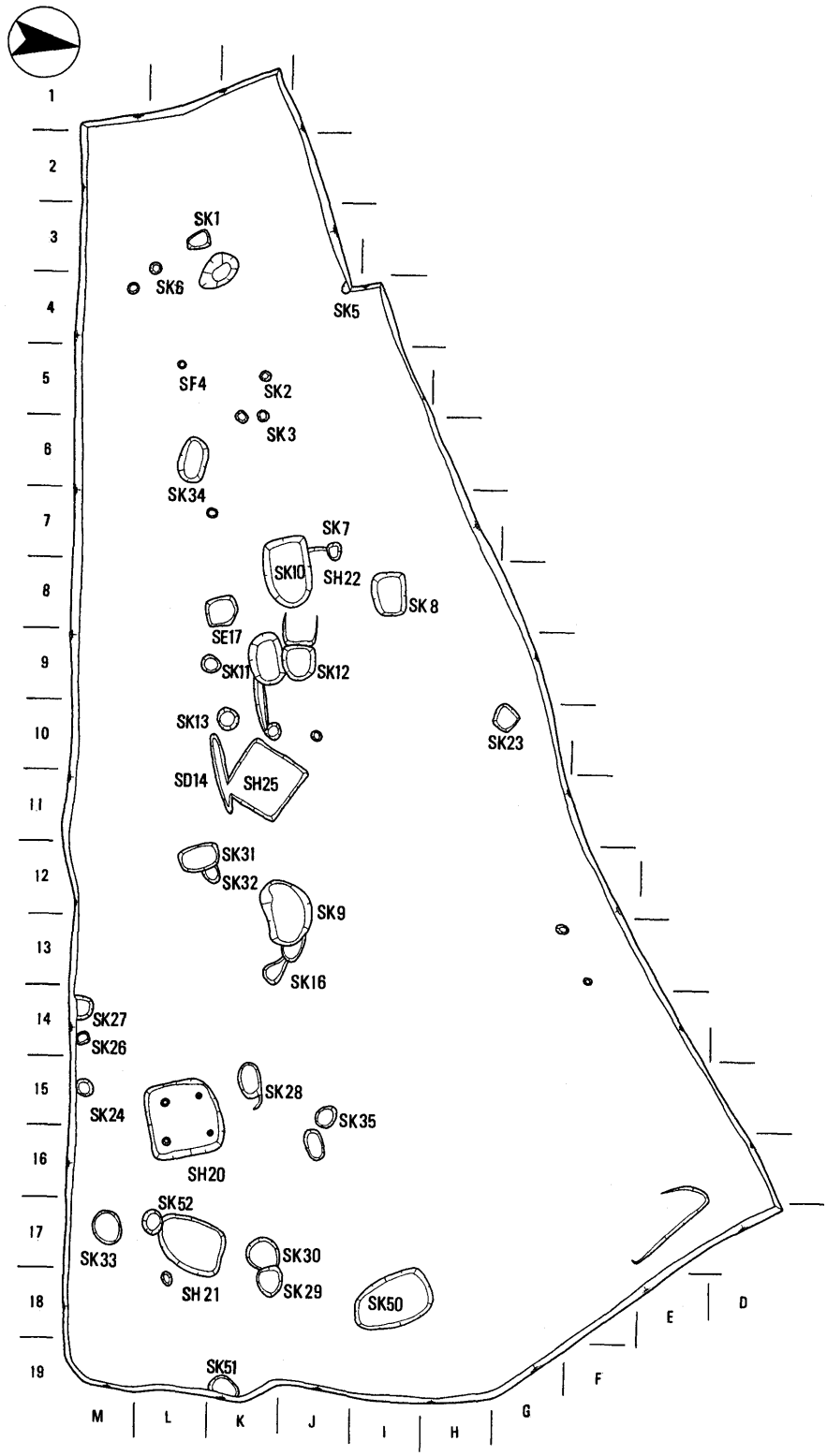
SK30 出土遺物（17・18） いずれも土師器甕細片である。長胴形態をとるかどうかは不明である。

SK31 出土遺物（19） 土師器長胴甕である。

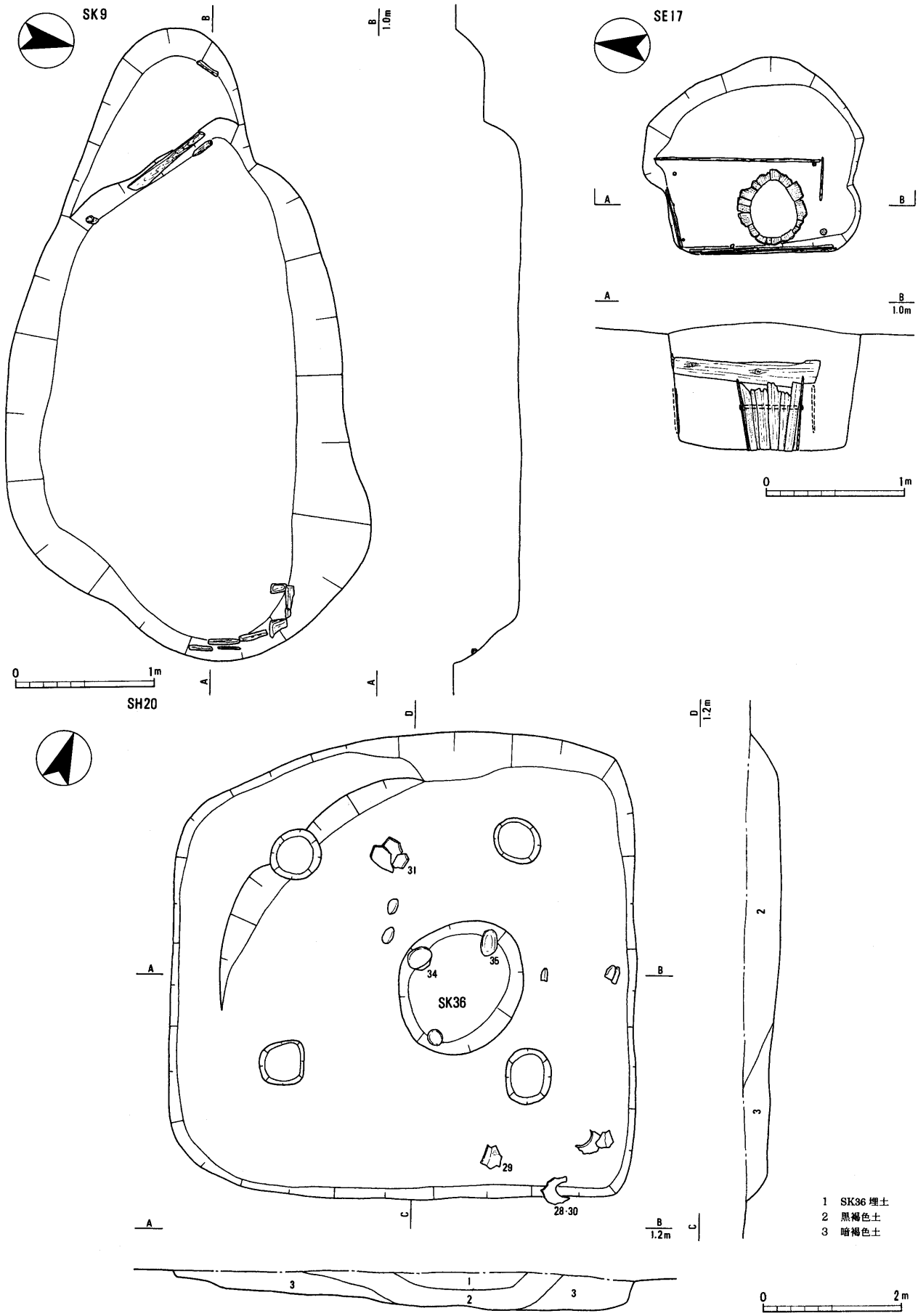
調査時・本報告		調査ニュース	所属時期
番号	地区	番号	
SK1	L3	土坑9	古墳～奈良
SK2	K5		古墳～奈良
SK3	K5・6		不明
SF4	L5		古墳～奈良
SK5	J4		不明
SK6	L3		古墳～奈良
SK7	J7・8		不明
SK8	I8	土坑18	不明
SK9	JK12・13	土坑25	江戸～明治
SK10	JK7・8	土坑19	江戸～明治
SK11	KL9	土坑22	古墳～奈良
SK12	J9	土坑21	古墳～奈良
SK13	K10		古墳～奈良
SD14	KL10・11	溝28	不明
SK16	JK13	土坑26	不明
SE17	LK8	井戸15	江戸～明治
SH20	KL15・16	竪穴住居2	古墳～奈良
SH21	KL17・18	土坑6	不明
SH22	J7・8		不明
SK23	GH9・10	土坑17	江戸～明治
SK24	M15	土坑5	古墳～奈良
SH25	JK10・11	竪穴住居1	古墳～奈良
SK26	M14		古墳～奈良
SK27	M14	土坑4	不明
SK28	K15	土坑24	古墳～奈良
SK29	JK17・18	土坑14	江戸～明治
SK30	JK17	土坑13	古墳～奈良
SK31	KL12	土坑23	古墳～奈良
SK32	KL12		不明
SK33	M17	土坑8	不明
SK34	L6	土坑16	古墳～奈良
SK35	J15		江戸～明治
SK36	L15・16	土坑11	平安時代末
SK50	IJ17・18	土坑12	不明
SK51	K19	土坑3	古墳～奈良
SK52	L17	土坑7	不明
－	J8・9	土坑20	
－	K9・10	溝27	
－	J16	土坑10	

※本報告の15・18・19・37～49は欠番

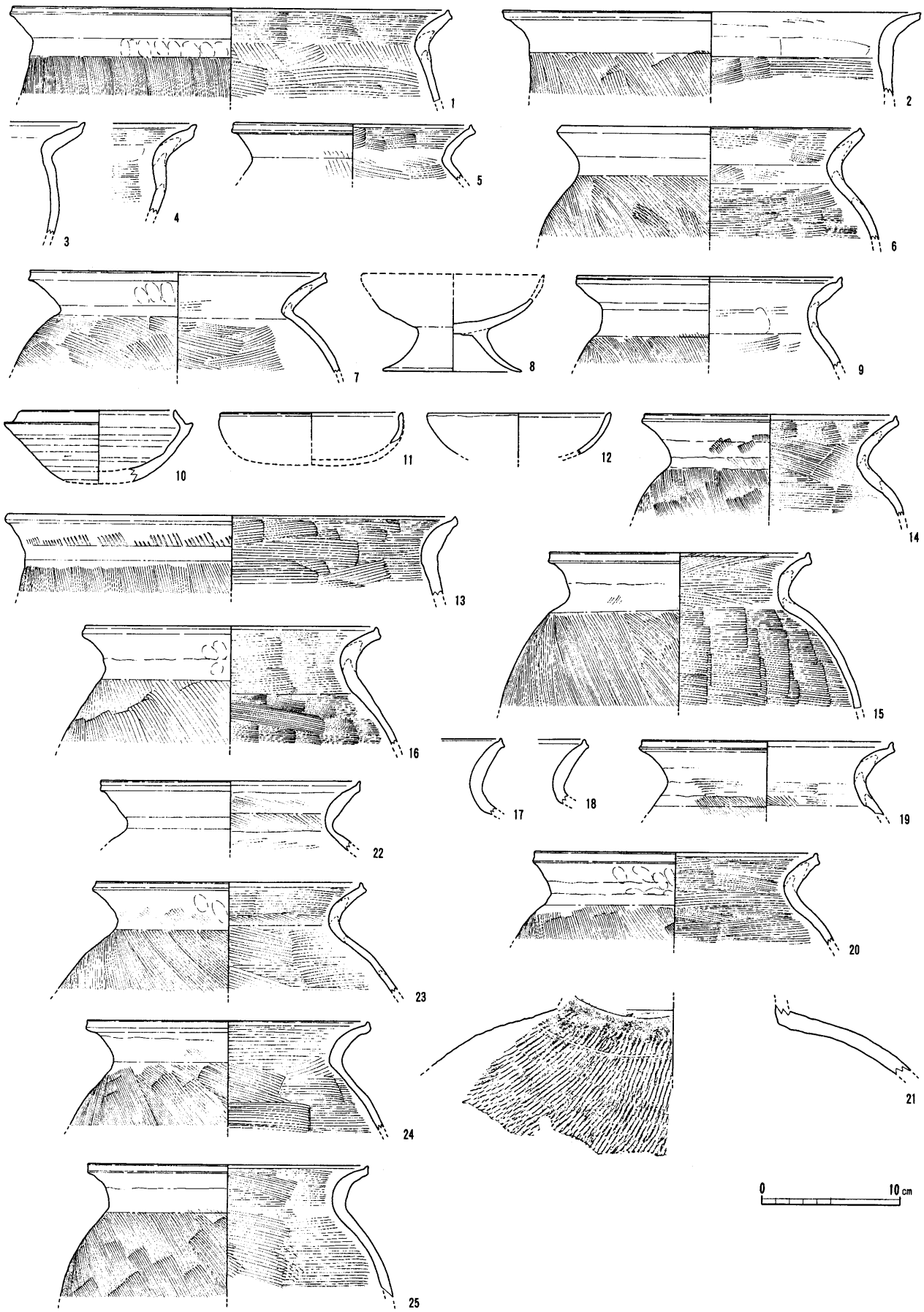
第7表 遺構番号対照表



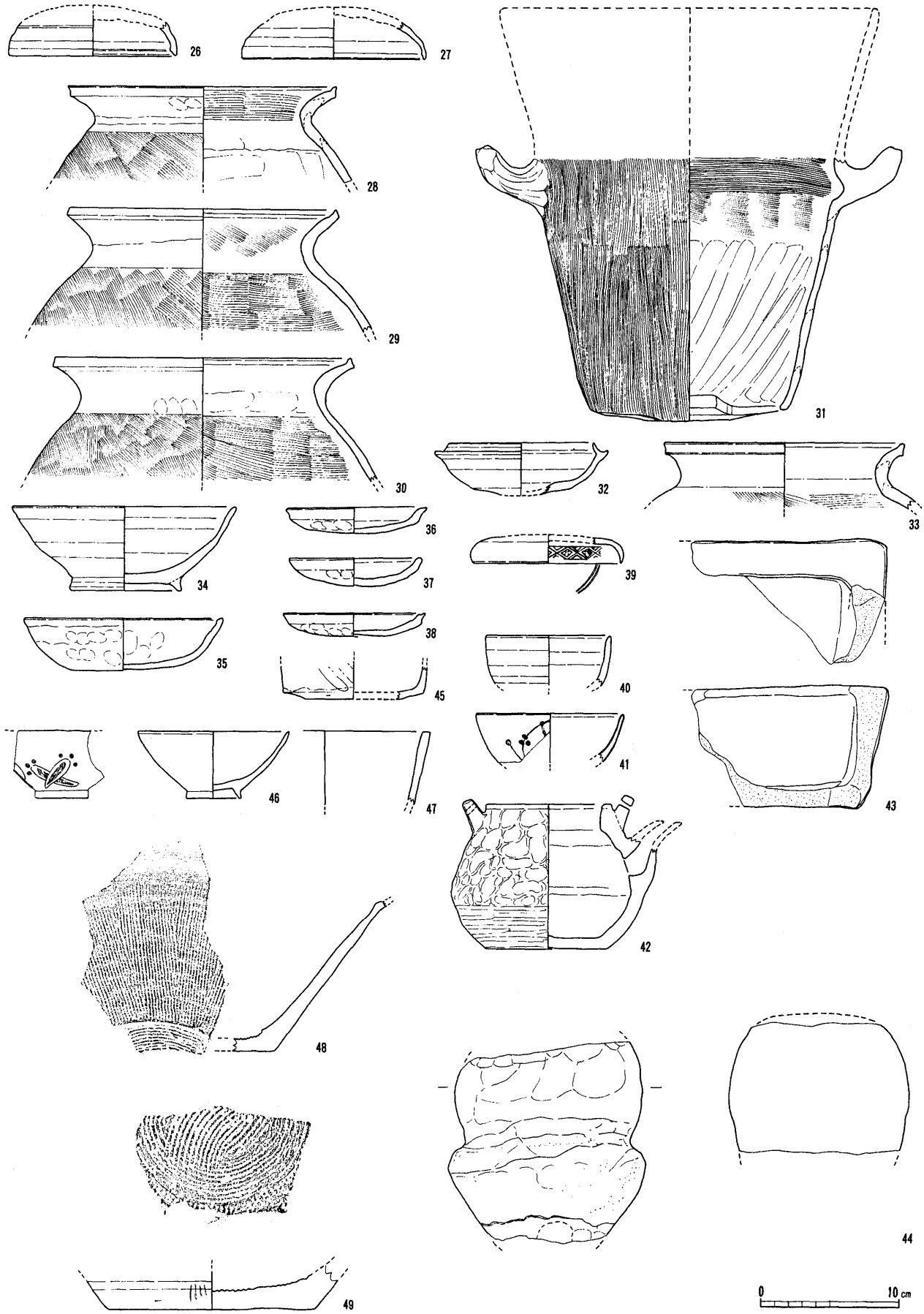
第 29 図　西黒部西山遺跡平面図（1:400）



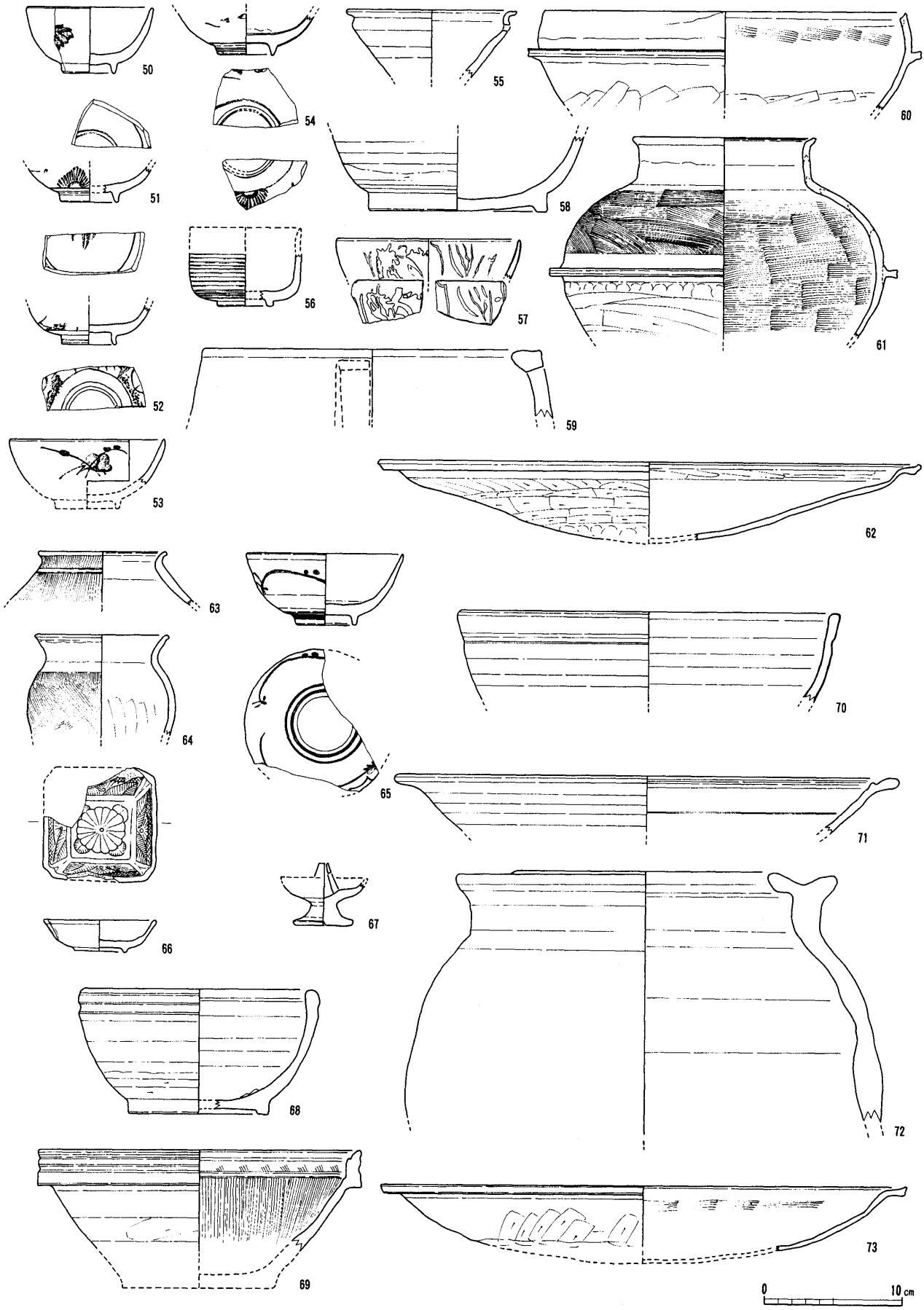
第 30 図　遺構実測図（SK9･SE17 は 1:40、SH20 は 1:80）



第 31 図　遺物実測図（1）（1:4）



第 32 図　遺物実測図（2）（1:4）



第33図　遺物実測図（3）（1:4）

SK34 出土遺物（20・21）　土師器長胴甕（20）である。21 は須恵器甕頸～肩部である。

SK51 出土遺物（22～25）　いずれも土師器長胴甕である。体部が球形になる形状であろう。

SH20 出土遺物（26～31）　須恵器杯蓋（26・27）はいずれも口縁部細片であるが TK209 型式併行期の所産と考えられる。土師器長胴甕（28～30）は体部が球形を呈する形態である。土師器甑（31）は把手部から下が残存する。底部は横一文字に陸橋を持ち、蒸気孔が２孔である。

SH25 出土遺物（32・33）　須恵器杯身（32）は TK209 型式併行期の所産である。33 は体部が球状を呈する土師器甕である。

（2）平安時代末の遺物

SK36 出土遺物（34～38）　34 は渥美産陶器椀である。12 世紀後半の所産と考えられる。35 は土師器杯である。36～38 の土師器皿は、全体にナデ・ユビオサエ成形・調整が見られ、最後に口縁部に強いヨコナデを施し段をつくる。

（3）江戸時代後半～明治時代の遺物

SK９出土遺物（39～44）　常滑産と思われる陶器方形鉢がある。染付蓋（39）は外面に緑色釉、内面に白色釉を施し、内面に呉須で文様を描く。環状つまみが頂部につくと思われる。染付碗（40）は白色釉を施し呉須で梅花を描く。陶器椀（41）は内外面に灰釉を施す。陶器急須（42）は表面に粘土を貼り付け毛羽立たせている。43 は常滑産と思われる陶器方形鉢である。44 は花崗岩製五輪塔空風輪である。

SE17 出土遺物（45）　瀬戸美濃産陶器合子と思われる。外面に灰釉を掛け、印刻文様を施す。

SK10 出土遺物（46）　染付椀である。白色釉を全体に施し、呉須で打出の小槌等を描く。

SK29 出土遺物（47）　瓦質土器である。細片のため器種は不明である。

SK35 出土遺物（48・49）　瀬戸美濃産陶器擂鉢である。ともに内外面に鉄釉を施す。

SK23 出土遺物(50～62)　50～54 は染付椀である。いずれも白色釉を全体に施し、呉須で文様を描く。19 世紀代の瀬戸産のものか。55 は瀬戸美濃産天目茶碗である。口縁部近くに直径 5.0 ㎜の孔をあける。56 は瀬戸美濃産鉄釉鎧椀である。19 世紀前半の所産である。57 は陶器刷毛目椀片である。全体に緑灰色の釉を施し、黄灰色釉を流す。58 は陶器鉢である。内外面に灰釉を施す。59 は常滑産陶器火鉢である。60 は土師器羽釜、61 は土師器茶釜、62 は土師器焙烙鍋である。いずれも在地産であろう。

（4）その他

包含層出土遺物（63～73）　63 は弥生土器壺である。後期の所産と思われる。64 は土師器甕である。口縁端部に刻みを施す。65 は染付椀である。白色釉に呉須で文様を描く。瀬戸産、19 世紀代のものか。66 は瀬戸産磁器角皿である。白色釉を全体に施すが、高台部については掻き取っている。内面には型押しの菊花文の陽文が施される。19 世紀の所産か。瀬戸美濃産陶器秉燭（67）は全体に鉄釉を施す。68 は灰釉陶器鉢である。内面にトチン痕が残る。陶器擂鉢（69）は全体に鉄釉を施す。いずれも瀬戸美濃産か。瀬戸産陶器鉢（70）は全体に灰釉を施す。71 は瀬戸美濃産陶器折縁大皿であると思われる。全体に灰釉を施す。72 は瀬戸美濃産陶器甕である。全体に鉄釉を施す。土師器焙烙鍋（73）は外面に煤が付着する。在地産と思われる。

4　おわりに

調査の結果、古墳時代後期から当地においても人の居住が見られた。現在の西黒部町が位置する微高地上に古墳時代後期の遺構が広がっているものと推察できる。古墳時代に属する周辺の遺跡としては、金剛川を挟んだ反対側に佐久米古墳群があるが、河川を挟んでおり当遺跡から直線距離で２㎞離れていることから、結びつけることは難しい。

第Ⅱ章でも触れたが、当地は旧飯野郡黒田郷に属し、中世には伊勢神宮領黒部御厨が成立していた。この御厨は塩業で知られたが、西黒部西山遺跡の調査で検出した SK36 は当該時期の遺構の一部と言える。今回の調査成果が、現在まで連綿と続く西黒部集落の歴史を振り返る一助となれば幸いである。

[註]

① 「西黒部遺跡」（松阪市史編さん委員会編『松阪市史』第二巻資料篇考古　松阪市　1978）

① 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

全景（北上空から）

竪穴住居 SH20（北から）

土坑 SK36 土器出土状況（北から）

井戸 SE17（北から）

平成5(1993)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１０８－３

池ノ上遺跡・小狐遺跡・西黒部西山遺跡

1993年３月

編　集　三重県教育委員会
発　行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　光出版印刷株式会社